女雜

月五四發行

第七十二號

之社

女鑑第七十二號目次

吉村つれ子



女鑑

名譽心は棄つべからず

名譽は、決して、願ひ望むべからず。而して、名譽心は、決して、棄つべからず。望むべからざるものにして、棄つべからざるものは、この名譽心なり。ああ、この名譽心の棄つべからずして、望むべからざる所以のもの、果して、如何なる故ぞ。吾人は、往々、世人の、其の故を知らずして、失德過擧あるを見ること、少からざれば、聊、試に、之を論はんとはするなり。

人生、最終の目的は、抑、如何なる點にか存するといはゞ、必、身を立て、德を全うし、天地に愧ぢざる人となり、千載の後も、名聲の滅せざらんことを欲せざ

學問も、事業も、皆、德行を保ち、名譽を全うせんが爲に外ならず。松の常磐なる操も、竹の正直なる節も、自然にして、人の譽を求むるが爲にはあらず。菊の芳ばしきも、蘭の秀でたるも、固より、人の賞愛を得んが爲にあらず。たゞ、其の淸き薰と、高き操との、世に比なければ、人の賞揚愛玩も、從ひて至るなり。されば、人の名譽に於けるも、亦、之と同じかるべし。已の德行を修むることを務めずして、妄に、名譽を求めんとするは、誠に、卑しく醜きものの行とぞいふべかめる。

名は、實の賓ともいへば、實の存する所には、名も、亦、之に從ひて擧がるは、自然の理なり。故に、已が德行の、世に顯れ、聲譽の盛に起らんことを望むべか

らずして、人の、必、稱賛感嘆するに至るべき實德實行あらんことを勉めざるべからず。人の、己を知らざるを患へずして、知らるべきことをすることを求むるといへるも、全く、此の義に同じきなり。

人にして、名譽を重んずる心なく、後の世までも、其の功業を遺さんことを願はざらんには、恥を重んじ、身を愼む心もなく、竟に、卑俗の群に陷らん。故に、名譽心は、決して、棄つべからずとはいふなり。己の實德實行を勉めずして、徒に、虛名虛譽を得んことを願はんには、必、大なる恥辱を得て、父母、朋友をも辱むるにいたらん。故に、名譽は、決して、願ひ望むべからずとはいふなり。

今の世に立ち、思ふまゝに行ふ人を觀るに、概、此の際を察せざるが多し。故

に、失德廢行のもの、日々に、益々、夥しきを加ふるなり。諸孃も、亦、能く、此の際を明めて、正しき理を踏み給へかし。

論説

和漢婦女公義心の差異

岩下方平

我が國の婦女が、公義を重んずることの厚きは、世界無比なること、固より、史を讀み、古今の事蹟を知る人の、明に、了得する所なれども、支那の古き時代より、近代に至る間の事蹟など、史上にて、通覽するときは、實に、言ふに忍びさることありて、いよ〳〵、我が國の婦德の立ち勝りて、彼の數十百等の上にあることを見るを得べし。

昔、彼の春秋の世に、楚といへる國に、白公の、亂を起しゝことあり。その時、楚人に、荘善といへるものあり。其の母に辭して、往きて、其の君の難に死せんとせり。其の母の曰はく、其の親を棄てゝ其の君に死ぬるは、義といふべきかと。荘善答へて曰はく、吾聞く、君に仕ふるものは、其の祿を内にして、其の身を外にす。今、母を養ふ所以のものは、君の祿なり。身、安ぞ、死なきを得んやと。遂に、辭して行きぬ。公門に至るころ、三たび、車の中に廢す。其の僕の曰はく、子懼るゝか。曰はく、懼る。曰はく、懼るれば、何ぞ返らざるか。荘善曰はく、懼るゝものは、吾が私なり。義に死ぬるは、吾が公なり。聞く、君子は、私を以て、公を害せずと。公門に及びて、頸を刎ねて死にきといふ。

此の一事の如きは、誠に、公私の分に暗く、大義を知らざるものといふべし。

幸に、莊善は、道理を聞き居たるが故に、其の行を誤らず、其の義に死にしかば、其の道は立ちしかど、若し其の母の言ふ所の如くせば、實に、其の子を傷ふものと謂はざるべからず。彼の國にも、亦、美譚もありて、斯かるもののみにはあらざれども、婦女の俗情は、概、斯の如きもの多きに居るは、察知すべし。之を以て我が國の婦女の、義理に厚く、公私の分を明にするもの多きに比せば、抑いかに。

我が國の亂世といへば、南北朝の時代に如くはなし。此の時に方りて、最、著じるきは、楠母藤原氏なれども、最、彼に、能く當れるは、瓜生保の母なり。其の子の、皇室の爲に、戰死したるを以て、却りて榮として、之を悲しむことを爲さず、益、將士の氣を振起さしめしが如き、彼の莊善が母とは、全く、相反、も

彼は、私を主とし、是は、私を去りて、公を重しとすること、天地の差ありといひて可なり。獨、是のみならず、我が國婦女の義に勇むもの、自、天性に存して、時ありては、其の言行に發し來るもの、開闢以來、未、曾て衰へざるなり。彼の鄭成功の妾たりし長崎の一女子が、彼の地にて、城上より、自投じて、死を遂げ、以て、清兵の凌辱を脫したるに、清兵は、舌を吐きて、婦女、且、然り、倭人の勇決、聞く所に負かずとて、驚嘆せしが如きも、亦、彼に勝るの一證たるを見るべし。

今や、彼との戰は、正に開け、我が　皇軍は、大捷を得ること、屢にして、益々進むの勢なるに、我が婦女子は、其の子弟夫兄等を失ふも、皆、痛嘆に、日を送らざるのみならず、益々義勇の本色を現し、雄々しくも、恤兵の義擧を爲し、或

は、奮て、野戰病院に赴き、負傷者看護の事に從はんとするものあるに至る。是、亦、以て、我の、彼に勝るを證するに餘あるものならずや。

以上述ぶる所の如く、我の、彼との差異は、著明にして疑なし。我が國の婦女子たるもの、須く、內に省みて、益、奮勵すべきことならずや。

女子教育に就きて（二）

山崎庚午

女子の任務、頗重し。他の妻となりては、內に、能く、其の家政を治め、夫をして、敢て、內顧の憂なからしめ、母としては、家庭敎育の實權を攬りて、其の兒童を敎化薰陶す。若、夫、一家の妻にして、無智妄迷ならんか。有爲の夫ありと雖、その志、伸すに由なく、家庭の母にして、頑愚曲摯ならんか。俊秀の兒童あ

りと雖、その後來の發達、得て望むべからざるなり。

家に、貞操にして、淑德ある妻あらば、夫は、外にありて、天下有益の事業に、力を盡し、以て、國を益し、世を補ふを得べく、温順にして、賢良なる母あらば、兒童、内にありて、圓滿なる家庭の訓化敎導を受け、後來の大人、豪傑を期するを得べし。夫を扶けて、天下有益の事業に、力を盡さしむるは、是、現在の社會に、補益を與ふるなり。兒童を敎育して、後來の大人豪傑を養成するは、未來の社會を興起するなり。夫、然り、然らば、現在の社會も、未來の社會も、女子の力、如何によりて、非常なる影況を蒙るものなり。否、語を強めて、之をいへば、現在の社會を振はしむるも、未來の社會を起さしむるも、一に、女子の力如何に由らざるなきなり。女子そのものゝ責任、豈、重しといはざるべけんや。

女子の負ふべき任務、斯の如く重きを以て、女子に對する教育の要も、亦、頗、大なり。女子教育にして、一旦、その道を誤らば、貞淑の妻なく、温良の母なけん。貞淑の妻なく、温良の母なくば、有爲の夫、志を伸すを得ず、俊秀の兒も、亦、その發達を期する能はざらん。茲に於いて、社會は、遂に、衰頽萎微して、永く、振はざるに至らんのみ。女子教育の要、いはざらんとするも、豈、之を得んや。

女子と家庭教育との關係

夫、女子は、その心性の如何を以て、品位の高下を定むべきなり。心性悪しき女子は、智識、學力高きも、決して、尊ぶに足らじ。されば、女子教育に於いては、先、第一に、心性の開發を以て、主要の目的と爲すべきこと、敢て、論を俟

たず。而して、此の心性を開發するに、最、適すべきものを、家庭教育とす。何となれば、父母は、兒女生るゝ時より、成長の後に至るまで、常に、之を、膝下に撫育し、一日も、之が管督の任を解かざるを以て、從ひて、其の兒女の性質如何を知り得、惡性を撓め、善性を進むべきは勿論、又、其の性質の存する所を見て、これと相適合する教育を施し、以て、兒女の心性を開發し、德風を敦からしむるを得べければなり。女子と家庭教育との關係、まことに深しといふべし。

且、夫、女子の、家庭教育を受くべき年限は、決して、短からざるなり。父母は、女子の、他に嫁し了せんまでは、絶えず、教訓管督の職を離るゝ能はざるなり。今、女子の結婚年齢を、大約、二十歳前後とすれば、女子に對する家庭教育は、實に、二十年の長年月に度るものにして、この長年月間に於ける。教育

そのものゝ善惡如何は、女子の後來に向ひて、非常なる大影響を與ふるなるべし。なほ、是のみならず、女子の生活は、多く、家庭の内に於いて、過ごさるゝを以て常とすれば、女子教育の大部分は、全く、家庭教育の占むる所なるべし。從ひて、家庭教育者の、女子に向ひての注意は、極めて深からざるべからざるは勿論、家庭教育と、女子とは、須臾も離るべからざるものなり。

史談

吉村れつ子　　大町桂月

高山景行、人、仰慕して措かざるものは、赤誠、一に之を貫けばなり。君に事へて忠となり、親に事へて孝となり、夫に事へて貞となるも、ひとしく是れ赤誠の發したるものに外ならず。されど、境遇の順と逆とによりて、赤誠を發する手段は自ら

異ならざるを得ざるなり。
柔婉靜淑なるは、女子の本色なり。强剛勇烈なるは、其本色にあらず。されど、柔婉靜淑は以て順境に處するを得べし。以て逆境に處するを得べからず。されば、女子たる者變に處するには、實に强剛勇烈なる覺悟なかるべからず。また、其本色なると然らざるとを問ふべきにあらざるなり。
おのれ、古今烈女の傳を讀んで、藤子の事跡に至る毎に、未だ嘗て卷を投じて感歎せずんばあらず。彼眇々たる巾幗の身を以て、君恩の師恩に代ふべからざるを悟り、一身を犧牲に供して、快刀一擊、纎手毒婦を倒して君側を淸めたるは、よく變に處したるものといふべし。今又茲に藤子の忠ありて、更に孝道を兼ね、勇あり、智ありて、遺風永く懦夫を起たしむるに足るの女丈夫を得たり。やがて、吉村れつ子これなり。
れつ子の父を吉村嘉六といふ。元祿の頃、丹後宮津の城主、阿部對馬守正福に仕へ、祿三百石を領して、用人役をつとめたり。その人となり、剛毅廉直にして、忠義の心深く、傍輩又は出入の商人より、紙一枚にても贈物を受けず、一に賄賂の弊を避

けて、よろづ私なく、日夜職務のことのみ心掛けて、忠勤怠らざれど、世の覺いとめでたかりけり。

其同役に渡邊茂太夫といふものあり。その性質、嘉六と相反し、邪智佞辨にして驕を好み、能を嫉みたれど、言を巧にし、色を令くしたれば、人皆此上なき良吏と思ひ、君にも無二の忠臣と思ひ給へり。かゝれば、茂太夫は出頭人となりて、旭日の昇る勢に、諸事おのれが心のまゝに取り行ひ、己に諛ふものは用ゐ、己に諛はざるものは退け、利を貪り、名を衒ひ、新法を工夫して、種々の租税を課しけれど、下ざまの難義、いふべうもあらざりけり。

かゝる佞臣なれども、君には深く茂太夫を信用して、よろづ其言ふ所に從ひ給ひ、嘉六はあれどもなきが如く、君の覺よろしからざれど、忠誠廉潔の行も世にあらはれず、冠履轉倒して國政正しからず、百姓の怨望次第に增して、國内到る處に不平の聲を聞かざるはなかりけり。

茂太夫は、嘉六ありては已の思ふまゝに事を行ひ難きを以て、之を退けんと欲し、様様に讒言しけれど、君には更に疑ひ給はず、役儀を取上げて、小普請役を仰付け給

ひぬ。げにや、良藥口に苦く、忠臣世に用ゐられず、瓦釜時を得顔に雷鳴して、民の怨聲は益高くなりぬ。あはれ、天未だ定まらざれど、人に勝つの時到らず、空しく恨を呑んで蓬蒿の下に老ゆる嘉六の心の中や如何なりけむ。晝はひねもす、夜は夜もすがら、國を憂ひ、世を慨きて、胸の思いとゞやるかたなき中にも、わづかに嘉六の心を慰めしものは、わつ子なりけり。世に掛替なき一粒種の愛娘にして、幼少の時、母に死別れたれば、父の情の露とりわけて滋く、いとゞ不便に思ひて、掌中の玉とめでいつくしみ、學問手跡なにくれとなく敎へけるに、其性もとより敏ければ、人にすぐれて才女のほまれ高く、姿、形もうるはしければ、内室の奥に召出されて侍女となり、まめやかにつかへけるほどに、内室の御氣にかなひて、またなきものと、思召されけり。かくて、嘉六が小普請の小役に貶されし時は、わつ子既に二十一歳に及びたり。嘉六思ふやう、我こそは年老い。君に見棄られて、此世の望も絶たれ。せめて娘には相應の聟を取り、我役儀を讓り、家名をも興さしめむとて、親族にも相談して、養子願の書面を差出しけるに、茂太夫妨げて君の御目に入れず、半年餘待ちけれども、何等の沙汰もなかりければ、嘉六ますます心苦しく

思ひ、日夜鬱々として樂しまざるのあまり、終に重き病に罹りて藥石効なく、無念と一聲、娑婆の土產に殘して、眼、瞑せざる五尺の體、果敢なく北邙一片の烟と消えにけり。

嘉六死して跡に男子なければ、祖先百戰の家祿を召しあげられ、家、斷絕して父祖の鬼も空しく餒ゆるに至れり。父に死別れ、孤身煢々として寄る所なく、愁歎やる方もなきに、女の身にしあれば、家名を繼ぐに由なくして、家さへ斷絕さる重ねがさねの不幸に、愁歎に愁歎を重ね、悲哀に悲哀を添へ、袖にやどる月影のみすみて、世の中は我身獨りの秋かとかこちしを、唯、奥方の深きいつくしみをほだしにて、さかすがに、數ならぬ身も捨られず、望なく、樂なく、味氣なき此世の中に、奥方の厚き情を便り、父の追善供養を心に營みて、我と心を勵まして仕へけるに、如何なる故にや、三七日も過ぎざるよ、れつ子は俄に暇を賜はれり。奥方はいと惜ませ給へども、君の仰せなれば、如何ともさ給ふことを能はず。なく〳〵暇をたまひければ、れつ子もなく〳〵宿にさがりぬ。

暗夜を遺れし一點の星の光もかき消えて、世の中は全く闇となれり。れつ子は今や

絶望の淵に沈めり。されど、わつ子は心をゝしき女なれバ、ひとりつく〴〵思ふやう、父上の役を貶され給ひしは、茂太夫の爲めなり。病を得てみまかり給ひしも、茂太夫の爲めなり。養子願の沙汰なくして、一家終に斷絶に及びたるも、茂太夫の爲めなり。思へバ茂太夫は父の仇、家の仇。よしや、我身は女なれども、仇を討たであるべきや。其上にも、父上の常にの給ひし如く、茂太夫は利を貪り、欲に耽り、非道の政を行ひ、依怙の沙汰多き姦吏なれバ、君の爲め、家中の爲め、百姓の爲めにも其儘には置くべからざる大罪人なるに、家中の人々その威權をはゞかりて、これを除かむとするものなく、專横益甚しくなりぬるは、まことに歎かはしき事の限りなり。されどとて、今、茂太夫の罪狀を申し上ぐるとも、御信任深き出頭の役人なれど、君にはよも實事とは思ひ給はじ。兎にも角にも、我は世にある甲斐もなき身なれど、茂太夫を討ち取りて、我も腹かき切りなど、君の爲めには忠ともならむ。親の爲めには孝ともならむ。これに上越す忠孝兩全の道はあらじと思ひ定め、佛壇なる父の位牌の前に伏し拜み、妾は女の身なれども、武士の家に生れたり。先祖傳來の刀もあれど、やがて、茂太夫の首を取りて手向まゐらせむに、父上樣には、早く修

羅道の苦患を免れさせ給へと聞え、わが亡き跡に、目付の手より主君にたてまつることもやあらむとて、長々と茂太夫の罪惡の段々を書きしるしたる一通の書面を挾箱に入れて、父の家に殘し置き、父が形見の着込を肌に添へ、大小をさしたる覺悟の扮裝、模樣やさしきかひどりに包みて、日暮るゝ頃より出でゝ、茂太夫の家に至り、吉村嘉六の娘、れつ、申上ぐることありてまゐりぬ。主人、茂太夫殿いますや、御目にかゝらむと言ひ入れければ、茂太夫は高の知れたる女子なれや、何事かあらむとて、用意もせず、自ら手燭を持て玄關に出るを、れつ子待ちとり、父の仇、覺あらむと、手早く刀を拔き、唯一討と力を込めて切付くるに、刀尖鴨居に當りて、少し撓む所を取直し、また振りあげて、電光石火の勢鋭く、肩先深く切込みたり。やれ狼藉者と呼ばりながら、重傷に堪えずして、後にのりて倒れ、持ちし手燭は消えてあやめも分かぬ如法闇夜となりけるが、呻く聲を目當に踏み込みて、二刀三刀さし通しけるほど、若黨仲間ども、打ちつれて走り來りたれど、闇の中にれつ子の刀の光はげしく閃めくに、心臆れて進みもえせず、とやかくと罵るばかりなり。れつ子既に茂太夫を斬殺して、父の恨をはらしたれど、また妄りに人を殺さず、役

人の前にて、深く腹切らむと、心を落付けて待ちけるに、やがて、目付役、橋本茂兵衛來りて、あわてゝ、れつ子の刀をもぎ取らむとせしかど、れつ子靜に大小を渡し、意趣ありて茂太夫を殺しぬ。此旨、主君に申しあげられて、御成敗あるべしと云ひけれバ、茂兵衛此由を申し上ぐるに、大に怒り給ひ、女人の身にて、私の恨を挾みて、重役の茂太夫に手向ひしは、上を侮る罪輕からず、不屆なる曲者なりとて、高山義右衛門に預け置かれぬ。儀右衛門はれつ子に向ひて、意趣の次第を問ひ糺すに、れつ子は、父の役を貶されし事、其恨を呑みて死し事、養子願の書面を差出せしよ、茂太夫妨げて、家終に斷絶せし事など、落ちもなく語りけれど、儀右衛門は其趣を申し上げたれども、怒り給ふのあまり、取り合ひ給はず、不屆の者なれど、幼少の時より、召遣ひたるものなれバ、奥の例にて、首をバ免じ、侍の法式によりて、切腹申し付くる由申し渡すべしとありけれど、儀右衛門は致し方なく、やがて本所の下屋敷にて切腹すべき日限になりぬれバ、介添人を仰せ付られ、れつ子を伴ひて趣きけるに、撿使の役人來りて申渡しの書付を讀み聞かし、三方に九寸五分を載せて、れつ子の前に置きければ、れつ子三方を押戴き、脇差を手に取りて、腹

につき立てんとする一刹那、門前より大聲をあげ、御意あれば、切腹相待たれよと呼はるものあり。何事にやと、刀を持ちたるまゝさしひかえて待ちけるに、幼なき男子をつれて入りくる一人の侍あるを、誰かと見れば、本山惣右衛門なり。幼なき男子は、宮本三左衛門の三男勝之助なりけり。

惣右衛門一通をとり出して、れつ書置の一通、御覧に入れしに、茂太夫の惡逆わかり、れつの切腹を免せられ、嘉六の跡目をも、宮本三左衛門の三男勝之助に申し付けられたれば、永く後見して、いよ／＼忠勤を勵むべしとの御意なりとぞ讀み聞かせける。れつ子は謹みてうけたまはり、感涙にかきくれて申しけるは、君恩身に餘りて、謝し奉る詞を知らず侍れど、切腹の事は、既に仰せ渡させ給ひたるに、其を今更御免ありては、御上の明なきをあらはすやうになりぬべし。茂太夫の惡逆あらはれたる上に、家督をさへ定め給へるは、此上もなき御恩にして、これにまさる喜はなし、早く冥途にまかりこして、父にかくと告げたく思ひ侍るなり。唯、私怨ありて茂太夫を討ちたるものと思召されて、御仕置仰付させ給へば、ありがたき仕合なりとて、勝之助を近付け、われ女の身として、其方を養子に仰せ付られ、吉村家

そのかせ給へること、まことに廣大の御恩なり。われと其方とは逢ふが別にて、果敢なき縁しにはあれど、會者定離を世の習とあきらめ、唯君恩の厚きを感佩して、吉村の家をつぎて、忠義を勵むべし。さらば、親の名乘を暇乞の盃と一所にせむとて、盃を左の手に持ち、なみ〳〵とつがせて、半飲み干し、右の手に脇差を握りて、左の脇腹にぐつと刺し、創口に盃をあてがひて、流れ出る血しほを受け、やよ、勝之助、此酒を呑みて親子の名乘をせよ、血を分けたる親子にあらずやと云へば、勝之助あつとばかりにて、盃を戴き、快よく飲み干してれつ子に向ひ、仰せの如く、御身は血を分け給へる母君なり。今生の御別、まことに名殘惜けれど、をゝしき母君の御心にあやかりて、弱年ながら、吉村の家を相續して父の役儀をも蒙るべけれど、御心を安んじて、御最期いさぎよく遊ばさせ給へといふ。れつ子聞きて大に喜び、其方未だ十五歳にもならざるに、母に力を付くる心のほど、あつぱれ、吉村の嫡子なり。來世にて父に語りなん、父もさぞ喜ぶならむ、其を樂みに一刻も早く最期を遂ぐべし。さらむとばかりにて、脇腹につき立たる九寸五分を右の方へ引き廻はし、いさ、御介措と打伏し、雪よりも白きうなじに刀を受けて、敢なくも、廿一歳の一期

の花は散りてけり。げに、いさましくもまた憐なる最期なりけり。
此の有樣を君に申上げたるに、いたく感じ給ひ、勇氣すぐれたる上に、あくまでも思慮深き女なりとて、惜ませ給ふこと一方ならず、せめては勝之助を取立てゝ、れつの亡魂を慰めむとて、勝之助を御小性に呼び出され、三四年を經て、新知二百石をたまはり、側用人の見習役に取立給ひけるに、智勇人にすぐれて、忠勤怠らず、世に隱もなき勇士なりけれど、れつ子の血を分けたるに相違なしと、人々感じ合へりきとなり。

あはれ、吉村れつ子、奧方に仕へて順境に處すれど、柔婉窈窕たる淑女あり。されど一たび父を失うて變に處すれば、勇壯凛烈たる女丈夫なり。赤誠は常に一なれども、境遇によりて、淑女ともなり、また女丈夫ともなる、烈女の性情其れ水の如きか。水波激瀲、琴韻潺湲として愛すべきも、一たび、風に激し、巖に觸れては、白龍跳り、萬雷轟くの觀あり。されば水の激するを見て、其常にあらずと識ることなかれ、變に處すれど、水、自から激せざるを得ざればなり。女子の勇烈なるを見て其本色にあらずと識ることなかれ。變に處すれば、女子、自から勇烈ならざるを得

されバなり。

佐々木累女が事

秋里豊成

累女は、武太夫といへるが女なり。武太夫は、土井大炊頭に仕へ、武藝に精しきを以て、名を當時に得たり。累も、其の技を承けて、女丈夫の名を取りしが、江戸に來り、聖天町に住居し、劍道の指南を以て、生計を營み居たり。其の出でゝ他に往くには、常に、兩刀を帶し、紺緒の草履を穿ち、四つ目の紋の羽織を着けたれバ、見る人、皆異様なるを怪まぬはなし。時に、白柄組、大小神祇組、町奴の輩、偶、途にて累に遇へバ、皆其の異様なるを嘲り、或は、之を辱むるものあり。累は、已むを得ず、捕へて之を懲す、皆、其の强膽なるに畏るといふ。或時、町奉行石谷將監は、累を役所に召して、曰へる様、聞く、汝は、出るに、常に、刀を帶ぶと、士女の警戒は、此くの如くなるべきも、女の裝にて大刀を帶ぶは、或は事を好むに似たり。されど、速に、女裝を變へ、編笠を被り、頭巾を用ゐて、面部を覆ひ、男子に扮つべし。と、累は、之に答へて曰ふやう、妾は、本、土井大炊頭の家來佐々

木武太夫の女にて、父死して後、家嗣の男子なく、家、遂に、絶滅せり。妾は、浮浪の身となり、僅に傳へ得たる武藝を以て、生計を營めり。是、他なし、武辨の士を迎へて夫となし、再、家名を興さんとするに在る故に、殊に、女装に武辨を顯はして往來するなりと、將監、之を聞いて、大に、感嘆し、之を同僚に語る。是より、遂に、殿中一般の評する所となり、土井大炊頭も、亦、默視し難く、乃、家中隨一の武辨者小杉重左衛門の次子九十九を以て、佐々木の嗣子となし、累を召して、之に妻し、悉く其の本領を復したりといふ。

累女が此の一事、以て、其の孝志の厚きを知るに餘ありといふべし。能く人の志を紹ぎ、能く人の事を述るとは、此の類をやいはまし。

わが宿のあきの萩さく夕かげに
　いまも見てしかいもがすがたを　（大伴田村大孃）

わが宿にもみづる楓みるごとに
　いもをかけつゝ戀ひぬ日はなし　（坂上大孃）

漫録

四時の變遷

大町桂月

一榮一落これ春秋と云ひけむ。暑往き、寒來るは、天の道なり。壯なる者は老い、盛なるものは衰ふ。人の身の上も、また、陰陽消長の理には洩れず。女子一生の經歷、殊に四時の變遷に似たるを感ずるなり。

春は天地の少女なり。少女は人生の春なり。東風そよ〳〵と吹くまゝに、結びし水とけて、谷水潺湲たる聲を發して流るゝは、みどりごの搖籃の中に始めて日の光を仰ぎて、呱々たる聲を放ちて乳を求むるに喩ふべし。燒野の上に萌えそめたる蕨の芽の纖柔なるは、みどりごの手足の纖柔なるに彷彿たり。やがて、さきいづる花の色は、をとめ子のにほへる俤をうつし、枝より枝にとびかひて囀る鶯の聲は、をとめ子の謠ふ節にかたどれり。されど、人々白たへの袖ふりはへて、野に山に、春の景色を尋ねて、ひねもす打興ずるが如く、少女の可憐にして、やう〳〵およすぐるを見ては、世の辛苦にやつれし父母もなぐさめられて、心、おのづから長閑なるべし。げに、春は樂しき時候なり。少年は樂しき時代なり。されど、徒に花鳥にうかされて、田の面をすきかへしつゝ種子を下すことを怠りなど、秋の收穫は得ざらむ。盛年は重ねて來らず。時に及びて勉强せずして、老いて臍

を唱ひとも、また及ぶべしやは。

春去りて夏となりぬれば、木々の花散りはて、、梢には緑の葉のみぞ繁かりける。をとめ子も年長じては、友禅の振袖をぬきかへて、よそほひ、復たはでなるをひねとせず。此際に及びては、父母の膝下にのみはあらず、さまぐの人に交るにつれて、世の弊風に染み易きこと、花散りし梢に手虫のつき易きが如くなれば、深く謹みて、白糸岐路のなげきを免るべきなり。かくて、年ますく長じて人の家に嫁すれど、姑につかへ、夫につかへ、小姑にまじはり、奴婢を使ふなど、身のつとめ、いやましにますにつれて、心の苦しみ、いやましにますは、猶夏深くなるにつれ、暑さはげしく、蚤。蚊など多くなりて、安らかに眠むることを得ざるが如く、春のたのしきにひきかへて、心苦しきこといふべうもあらず。時には恨を子規に寄せて、血を吐く思もあるべく、時にはまた、夏痩と答へて忍ぶ涙もあらむ。

秋の初になりぬれば、今年も半は過ぎしなり。わがよふけゆく月影はいとゞ憐を添ふれど、暑さ消えて、朝夕の風すゞしく、起居いとやすくなりぬるは、女の身のあまたの苦みをなめて、人の心の頼み難きをさとり、巧に世に處する法を覺えて、また苦しとも思はざるに似たり。やうく、西ふく風身にしみて、蟲の聲々あはれなるも、まかすかに、七草の花、春の花にもまして、一種可憐の趣あり。女の身も亦色香やゝ失せぬれど、禮節にならひて、よろづまめやかなる風姿は、少女にもま

まりて尊さを覺ゆるなり。かくて、五穀、果實など、全く熟したれど、収穫終りて、百姓ども皆太平樂を謳ひ、和氣洋々として鎮守の森に溢るゝは、玉の如き男子、花の如き娘ども、いくたりとなくやすらかに生みて、一家團欒の中に、無量の快樂自から生ずるが如く、心にかゝる浮雲はれて、願望の月いとゞまどかなるべし。

秋老いて、冬の初になれば、小春日和うるはしく、長閑なること春にも劣らず、鳥の聲々滑らかにして、立田川邊に錦流るゝ有様は、年老いて世累なくなり、數多の子ども皆膝のほとりを圍繞して、反哺の孝を盡すによりて、老母の心の閑にして樂しくなりたるにも譬へつべし。科戸の風はげしくふきまさるまゝに、木の葉ちりはてゝ、滿園皆枯木となりて、いとゞさびしくなりぬるは、齒落ち、目くぼみ、腰は梓の弓と曲り、額の皺は齢の數と共に添ひ、形容枯稿して見る影もなくなれる人の身の上に異ならず。かくて、寒さいよ〳〵つのり、山川草木悉く白雪の中に埋れて、一年空しくこゝに終る。人の齢も亦いよ〳〵加はり、白髮雪と相映じて、いとゞすさまじく、遂に無常の風にさそはれて、一命、窮陰と共に空しくなりぬべし。

看ずれど、四時自然の理、春あれど秋あり、人間必須の勢、生あれどまた死なきを得ず。迷へど南山の齢も短く、悟れば蜉蝣の一期も長し。人生を夢と見るも、はた、眞と見るも、一に人の心の如何にあり。天地自然の變遷を解するものにして、

始めて共に人生の樂事を語るべきなり。

才女逸話（三）

山崎庚午

九、多代女

多代女は俳諧の名手にして、殊に、才女の噂高かり、身、風流を好みて、須賀川に閑居す。ある時、俳家太郎彦といふ者、公務を帶びて、此地を過ぎけるついで、多代女の閑居を訪ひけるに、自身、駕輿に乘りて、從者鎗を荷ひ、挾箱を擔がさせ、恰も大諸侯の如し、やがて、多代女、相見て、うちは笑みながら、短冊とりわげ、一首認め、太郎彦に示しける。

須賀川や水鷄のみちもあるものを

太郎彦、頗、羞色ありしといふ。吁、芭蕉は、くたぶれて、宿を藤の花にかり、西行は、花を慕ふて、限ある身の衣を代へて行く、これ、詩人の本色のみ。然るに、太郎彦、從者を從へ、駕輿に乘りて、他の閑居を訪ふ、勢威、極めて、堂々たるが如しと雖、知んぬべし、そのうち、俗氣、俗臭の紛々たるを。多代女の諷刺、まことに、太郎彦項門の一針といふべし。

十、田捨子

捨子は、丹波の國、柏原の人、田氏なり。幼時より、極めて、聰慧にして、且、風雅の心高かりけり、六歳の時、雪の降りける朝、

雪の朝二の字二の字の下駄のあと

と口ずさみて、人を驚かしめたりといふ。實情、

眞影にかき出して、眼前に横はるこの句を見て、孰か、六歲の兒の作とせんや、實に、奇才といふべし。後、家に聟を迎へて、男子五人あり。夫、死してのち、盤桂禪師を師として、尼となり、貞閑と名づく。俳諧をも、季吟法師に學びて、頗、妙なり。

粟の穗や身は數ならぬ女郎花

花をやる櫻や夢のうきよもの

等の句あり。捨子、薙髮せる時、自書に賛して、

秋風のふきくるからに糸柳
こゝろばそくもちる夕かな

この女、また、歌を能くせしことを知るべし。捨子、尼となりてのち、道心堅固に、敎を守りしかバ、盤桂禪師も、いたく感じて、巳れの寺、龍門寺の傍に一菴をしつらへ、名づけて、不徹菴といひ、捨子を住はせたりといふ。捨子、なほ、其家にありし頃、ある諸侯の、出遊のついで、訪ひ來り給ひて、

柏原にをしやすて置く露のたま

といふ句を給ひしといふ、知るべし、當時、この女の雅名、高かりしを。嗚呼、捨子は、貞操高く、才氣深き女にてありけるよな。

十一、秋色女

秋色は、武江の人なり、性、怜悧よして、幼時より才名高し。俳諧に妙を得て、人を驚かしむる堪能あり。十三歲のとき、上野の花見に至りて、清水寺觀音堂のうしろなる、井端の櫻に、

井戸端の櫻あぶなし酒の醉

といふ句を付けたりしに、此句、秀逸のほまれ高く、秋色の俳名、遠近に轟く。後の世に至るまで、この櫻樹、秋色櫻とて、存すなり。晋子其角が門に入りて、俳道を極む。其角の門に入る時、

蜆とり早苗に並ぶ女かな

と口ずさみ、同門の、堂々たる五尺の男子をして、驚嘆措かざらしめしといふ。其後俳名日に高く、俳諧の判者となり、菊后亭といふ。此女、姓、頗、孝順にして、其行の賞すべきもの多し。ある時、一諸侯の召すところとなりけるに、秋色の父、日頃より、其諸侯の庭園、美なるをきゝて、如何にもして、之を見んと思ひ居たれバ、よき折なりとて、秋色が從僕に扮して、其邸に至り、殘る隈なく、庭園を賞觀しけるに、歸途雨いたく降り來りたれど、行歩の困難、いふに絶えたり。秋色は、諸侯の邸より、駕輿にて送られ歸りしに、父は、從者の體なれど、駕輿にも得乘らで、歩み來るさまを見て、秋色、いと、かなしきことに思ひ、殊更、駕輿夫に用事を命じ、その居らざるを窺ひ、父を誘ひて、駕輿に乘せ、己れは、父のまとひたる竹の子笠、紙合羽を取りて身を掩ひ、父の風體を爲して、家に歸りたりといふ。その孝志、この一事に兆して、知るべきなり。此女の俳句中、絶妙のものを、

翠簾さげてたが妻ならむ涼舟
ものゝふの紅葉にこりず女とは
獨居やこかみ火鉢も夜半のとぎ

等なりとす。享保十年、乙巳、四月十九日、申刻

身まかりぬ。辭世にいはく、

見し夢もさめても色のかきつばた。

十二、西嶋某女

西嶋某の妻は、才女にして、且、俳句に妙名あり。ある雪のいたく降りたる夜、その夫、わが家に召使ふ小奴をつれて、外出せんとせしかば、妻、さまざまに之を止むれども、聞かず、さらでよ、雪降りて、寒さも強し、御身のさはりのみならず、小奴も、いと、あはれにとて。

我子ならともにはやらじ夜の雪

と、無限の情を、一首の詠にいひあらはしければ、夫も、大に感じ、遂に、其外出を止めけり。世人、これを聞きて、古は、一首の歌、よく、天地、鬼神を感泣せしめ、今は、一首の俳句、よく、夫の外出を止めしむ、と、語りあへりとなむ。

又、これは、豊後國わたりの事なるが、ある片山里に、貧くくらして、子ひとり持てる夫婦ありけり。何やらん、心に違ふことありて、男、女房に離縁とらせんとせしかど、女房、悲しきことの限なく、様々にわぶるも、男、聞いれず、女、止むなく、涙と共に家を立出づるとて、

すれ／＼の中に花さくとくさかな

と、口ずさみけるに、男も、大に感じて、再び呼戻し、睦じく暮し遂げたりといふ。

月のうた百首（下）

井上頼文寄送

成島和鼎選

新續古今　稱名院内大臣

月かげもやどりさだめし志ら露の
たまえのあしに浦かせぞふく

月清　後京極攝政

たち出で丶眺むる方ぞかはりぬる
ねぬよの月のかげにまかせて

新拾遺　中納言爲藤

浪華がたいり志ほ近くかたぶきて
つきよりよする沖つ志らなみ

玉葉　大江義重

橋立やまつふきわたるうらかせに
いりうみとほく澄める月かげ

續後撰　平重時朝臣

たまひらふ由良の湊にてるつきの
ひかりをそへてよする志ら波

家隆

玉葉

海のはて空のかぎりもあきのよは
つきの光のなかにぞありける

後京極攝政

月清

たびびとを送りし秋のあとなれや
入江のなみにひたすつきかげ

爲尾

千首

下折をきかぬばかりぞつきかげは
まつそのこさぬゆきの志ら濱

爲氏

續拾遺

すまの浦や關のとかけてたつ波を
つきにふきこす秋の志はかせ

後京極攝政

玉清
なるみがたあらいそ浪の音はして
沖のいはこすつきのかげかな
加茂政平

大木
住よしのあまくだります松の上に
空よりかくるつきのしらゆふ

信太杜
杣人もこゝろありけりあきはなは
月もれとてやみや木ひくらむ

新勅撰
秋はまだあきの半もすぎぬべし
かたぶく月のをしきのみかは
雅世

續撰唯
名に高きあきのもなかの月なれバ
千よを一夜のひかりとやみむ
順徳院御製

玉葉
つまぎこる遠山びとはかへるなり
さとまでおくれあきの三日月
藤原康光

續後撰
さとゝほき野中のいほの月かげに
啼きてよふかき鳥のこゑかな
式子内親王

新古今
宵のまにさてもねぬべき月ならむ
山のはちかきものとおもはじ
大藏卿有家

新拾遺
花をのみなじみなれたるみ芳野ゝ
こずゑにおつるありあけの月
法印定圓

續拾遺
くれたけのは山の霧のあけがたに
なほよをこめてのこる月かげ
伏見院御製

新後拾遺
行く秋のすゑ葉のあさぢ露むかり
なはかげとむるありあけの月　光俊朝臣

續古今
月を見むおなじ空ともなくさまで
なぞふる鄕の戀ひしかるらん　太宰大貳俊兼

玉葉
明けやらぬ草の枕のつゆのうへに
月をのこしていづるたびびと　津守國平

新續古今
草まくらねられぬまゝのあり明に
つきを友とぞいそぎ立ちぬる　鴨長明

新古今
まつしまや汐くむ蜑のあきのそで
月はものとふならひのみかは

壬二
とまるべき鈴の篠屋はあれにけり
さとまでおくれ野邊の月かげ　家隆

續古今
夕露のいほりはつきをあるじにて
やどりをくるゝのべのたび人　定家

新勅撰
獨寢のよさむになれるつき見れバ
ときしもあれやころもうつ聲　後京極攝政

遺玉
心こそもろこしまでもあくがるれ
月はみぬよのしるべならねど　定家

雪玉
一年をいづこの月のつゝみ置きて　逍遙院內府

秋わらはる丶ひかりなるらむ
太政大臣室

身のうきを慰めとてやかずならぬ
そでにも月のかげやどすらむ
法印長覺

續拾遺
晴れくもる人のこゝろの中までも
そらにてらしてすめる月かな
定家

玉葉
こし方は皆おもかげに浮かびきぬ
ゆくすゑてらせあきの夜の月
西行法師

續後撰
よの憂に一かたすらすうかれゆく
こゝろさだめよ秋の夜のつき
讀人しらず

續拾遺
まち出でゝいくたび月を眺むとも
思ひはれずバかひやなからん
二條院三河內侍

新拾遺
つきをみて心のまゝにあくがれむ
いづくか秋のすみかならまし
民部卿實敎

續千載
物おもふ人のためとやあきのつき
うきをわするゝ影をみすらむ
戒秀法師

續後撰
行末もこよひのつきを思ひ出でゝ
さやけかりきと人にかたらむ
俊頼

千載
思ひくまなくても年のへぬるかな
ものいひかはせ秋のよのつき

詞華
いかでわが心のつきをあらはして
やみにまどへる人をてらさむ
左京大夫顯輔

金葉
いづくにもこよひの月を見る人の
こゝろやおなじ空にすむらむ
民部卿忠敎

玉葉
いつもかくつきにむかへる心にて
すまば憂世もなぐさめなまし
前大僧正道潤

新古今
ふけにけるわが身の庵を思ふまに
はるかに月のかたぶきにけり
西行法師

風雅
心てろやゝすみまされ世のなかを
のがれて月はみるべかりけり
前大僧正道玄

續古今
いにしへはわれだにしのぶ秋の月
いかなる世々を思ひいづらむ
爲家

新古今
山のはにおもひもいらじ世の中は
とてもかくてもありあけの月
藤原盛方朝臣

續後撰
よの中に猶ありあけのうきみをや
難面きものとつきは見るらむ
藤原隆祐朝臣

續後新
ながめつゝつもれる人の老のよに
月ももとみしあきやかなしき
津守國經

前大納言經顯

新千載
もろくちるおいの涙もいとはれず
　そでにやどして月をみるよは
　　常盤井攝政

續拾遺
おいぬとて身は歎かじなわり明の
　月もさかりのころはすぎにき
　　前大納言雅言

新後撰
しほの山さし出の磯のあきのつき
　やちよすむべき影ぞ見えける

文化二年丁丑閏八月私抄古集詠月和歌取次書以呈林公韭公之需也。闕名之憚不少云
　八十六翁　源和鼎

をんな仁義物語上（一）

著者未詳

はるさめのふりすさぶともなきつれ〴〵に、みやつかへする女ばう、いとま有けるにや、三人あつまりて、こしかたゆくすゑのものがたりして、つれ〴〵をなぐさみけるに、なかにも年たけたる女ばうの申けるは、をんなほどはかなきものはなし、そのゆへをいかにといふにわらはのやうにとしふくるまで、おつとをもたぬもよろしからず、又わかきときおつとをもてど、ゆさんものまふで物見などにも、おつとの心をうかゞひ、我身をわがままにならねど此くわり、みな〳〵はおつとをもつともたぬは、いづれがまさり、いづれがおとりたるぞといふ、わかき女ばうの申けるは、されバわ

らはもあけくれその事をあんじくらし候ところに、此ほどさるかたより、えんづきの事申きたり候ほどに、わらはの返事には、まづ〳〵わかきうちは、ゑんづきはすまじきよし申候へど、中だちの申けるは、をんなは三しうといふ事あり、おさなきときはおやにしたがひ、さかりのときはおつとにしたがひ、年よりては子にしたがふ、これ三從のみちとて、こうしのをしへなり、此をしへをそむく事、にんげんのみちにあらず、さかりのときおつとにそはずして、年よりては子もなし、それはあやなき事と申候ほどに、はらはもげにもとおもひ、とはどしあはむなかだといふ、又十七八なる女ばうの申げるは、仁義れいちしんの、五しやうも、をんな三しう、其しなあるべし、わらはが身の上をかたり申べし、此ほどもかなたこなたよりえんづきの事申きたり候へども、わらは一ごんおもむき申さず候、そのゆへは、わらはおやを一人もちて候が、おつとをもちては必ならずふかうにあたる事、めのまへにおほし、たとへばしうとめは大かたよめをにくむもの也、しかしながらをんなはおつとにしたがふみちなれど、おやにはおろそかにあたれども、まづしうとめ、又はおつとの心にしたがふ也、おやかう〳〵にあたる時は、しうとめのきよいらぬ事うたてけれども、せけんにおほくある事也、かやうのことをおもふ時は、しよせんおやをもちたるあひだは、おつとをもつまじきとおもひさだめて候、こうしのをしへにも、第一はおやこう〳〵のみちならずやといふ、年た

けたる女房の申けるは、何れもの心のうちかんじ入参らせ候、さりながら一ごおつとをもたずしても、世はわたられず、去かれど、みな／＼もやがておつとをもち給ふべければ、ふうふのみちの、こうしのをしへ一とをりをかたりてきかすべし、まづふうふのみちをよく／＼しめじの給へり、つしむとはふうふのあひだへだてなく、中よくしてものいさかひをもせぬ事也、おつとのやくはほかをとゝのへ、つまはうちをとゝのふるやく也、うちをとゝのふるに、みな／＼のやうなるわかき女ばうは一つのたしなみあり、つねにやどよてはまひなひけしやうもして、つまはづれもそろへて、ぞんじにつきおつとに見かぎられぬやうにたしなむ事これふうふのみちなり、みかぎらるゝによつてなかわしくなるなり、されどうちをとゝのふるをもつはらみちとす、又あるひは物まうでもの見ゆさんかりそめにもよそへゆくときは、さのみまひなひけしやうもせずしてゆく物也、かくのごとく心をもつときは、おつとの心をんなにへだてなしいまごろせけんをみるに、うちをとゝのふるをんなはまれにして、みなそとをとゝのふるをもつはらとす、たとへばかりそめにもよそへゆくときは、まひなひけしやうして、つまはつれをそろへたしなみてゆく、つねにうちにてはたゞとりみだしたるていなれば、これまづおつとの見かぎる物也、又そとへゆくときたしなみまひなひけしやうするを、おつとは心をく也、されどふうふのなかへだて有てよろしからず、又おつとはほかをとゝの

ふるといふは、まづくがいせけんをとゝのふる事なり、又はかをとゝのふるは、はかをつゝしむ心もあり、はかにしのびづまをも、もたず、たのをんなに心をもかけず、たゞしきをつゝしむといへり、おつとの心たゞしからねば、ふうふの中あしくこれはおつとのたしなみ也おつとふうふのみちたゞしからざるときは、あるひはくにをやぶりあるひはいのちをうしなふ事、いにしへともせけんにおほき事也、むかしからくにのゆうわうと申奉るは、はうじといへるをんなにまよひ給ひてはんきさきをすて給ふにより、いのちはほろびあしきまにをし給ふ、又げんそうくわうていは、やうきひに心をみだしくにをやぶり給ふ、かやうにていわうの御身のうへにさへふうふのあひだつゝしみ給はねど、あしき事いできたる、ましてまだ〳〵の人々、此みちをつゝしまずんばよろしかるまじきといへど、わかき女ばうこれをきゝ、よきかくもんをこそいたし候へとてもの事に、たづね申たき事の候、もろこしのけんぢよとはいかなる人にてあるやらんととひければ、としころの女ばう申やうけんぢよもふうふのなかに有、けうこうといふときめく人のつまに、はくきといへる女ばうありしが、やかたに火事いできたりでてんにひかゝりけれど、いそぎたちのき給へといふ、はくきの給ふやうは、をんなたるものは、われにろふたるはうふとて、二人のかしづき有、此ものきたらねば、夜いゑをいづる事なし、はゞふきたれるをまつとのたまふところに、一人はきたりたり、今一人は

いまだきたらず、はやく御のきあれといさむれども、そんなのれいぎ、二人そろはねば、よるはあるかぬみちなりとて、つゐにやけしに給ひけり、これをきゝて人のいふは、やかたをたちのきて、いのちをたもち給はぬはをろかなりとぞ申す、又けんじんの給ふは、たちのくはふうふのみちにあらず、みちをそむかむ、ふたゝびおそつにおもてをむくる事あるまじ、たとひそのおつとりべつしたりとも、きゝつたへてふさいにせんといふものあらじ、しからば人にゆびさしせられて、いきたるかひあるまじ、しゝてけんぢよのなを、まつだいにのこす事、これぶつほうにとりて、ほとけぼさつのくらゐなりとの給へど、みな人かんじけり、

操櫻　伴蒿蹊

丹波桑田郡小林村とて、亀山ちかきに木匠某か妻長といへるおり、夫婦が中に、女子二人ありて、いまだ幼きほど、夫は江戸大火後、造作多きをたのみて下りしが、終に、かしこにて、妻をまうけ、音信もせざるに、妻は、操を守りて、二人の女子を養育して、縫針、洗濯の賃業をして、貧き世を堪忍びぬ、さて、夫の愛せし櫻一樹、庭前にあるを、形見と守り、夫に仕ふる心地に、木のもとを清め、枝をいたはり、假初にも、人に折することなし、かくすること、二十年許、樹はますます榮え、二女も生長して、それ〳〵に身も納りぬ、かくて、此婦身まかりける後、櫻忽に萎み衰へたり、よりて、心ある人は、呼て操櫻と稱す、非情

の草木も、人の誠に感應すと、同國馬路の醫中河東白の話なりと、播磨の人兒嶋尙善傳ふる、

（閑田耕筆）

井蛙小錄　井上頼文

吊楠帶刀君之古墓歌

洛東老樵閑田盧蒿蹊

ちゝの實の　父のをしへ　はゝろ葉の　ははのいさめに　まつろひて　かしこきかもよ　すめらぎの　御代もふたみよ　おのが代も　ふたよをかけて　あづさ弓　とりつたへつゝ　まごゝろに　つかへまつりし　うま人の　おくつき所　こゝとしも　みれど泪の　あめとふる　その世がたりを　風のとに　きくが中にも　かなしきは　まきの荒野の　若ごまの　いさむ心の　かひもなく　時をもわかず　あしびきの　やまひになづみ　かくながら　窓のもとにて　まからんは　あたら此身を　仇うちて　すては捨んと　ひだたくみ　うつ墨繩の　ひとすぢに思ひさだめて　とても世に　ながらふべくも　あらぬ身の　假の契りを　何かはときこえあげては　たまへりし　妻をもうけず　あらたまの　としもへなくに　この野邊の　露とけぬとか　きかはあれど　親のこゝろを　こゝろにて　君にまめなる　みさをはも　しるしに栽ゑし　楠の樹の石になるまで　世の人の　かたりつぎつゝ

たちばなの　かくはしき名の　あにくちめ　やも

花ふゞき

その二

鹽井雨江

主上の北遷、一の宮の南徙、ゆくへを知らぬうき雲の、世にかさなれど、櫻姫は、大空の日にも月にも離れ給ひけむばかりのおん心地せられ、更に思ひやる天をおぼしわかず。君なくなりて、都はあやなき闇。今よりは、誰が爲住むべき塵の世や。何か惜しむべき月花ならむ。雲の末、草の奥、人知らぬわたりに移りて、埋れも朽ちも爲しはてむとのみおぼせど、さすがに住み馴れつる家居、人を思へば、軒のつま、垣の袖、ものいふとにはあらざれど、名殘の御心にかゝる事多く、なか〳〵に、立ちも離れむ方を知らず。唯床を抱き、窓にすがり、ながめ暮らしてのみおはしゝが、世の中の人心のはかなさは、此の日ごろ、いつき仕へたる者ども、秋立ちて、木の葉の枝にとまらぬがごと、ちり〳〵に散りゆきて、さらぬ時は花のあした、月の夕べ、やうあき席にも問ひまつはり、みけしの袖の露を掃ひ、御座の下の塵を拾ひ

たる人々も、世のうき嵐のかゝると見れど、なか〳〵に露のとぶらひもせず、塵のおとづれだにもせず。ましてや、虎狼の武士原は、八雲立つ神籬をも凌ぎ、九重の高き御位をさへ、動かすほどの、無念の者どもなれど、何をかはゞかり、誰をか恐れむ。猛り〳〵て、天が下を、わがもの顔にふるまへど、都の中は、聞くにつけ、見るにつけ、恐ろしき事のみ多くなりもてゆくに、御息所は怺へさせたまはず、今はうき世の外にすみはてむとて、深草の里の奥ふかく、ものさびしきわたりに、竹のしばがき、松のとぼそ、あさましきむぐらを求めて、移り住み給へらる。

さはとて、よそながら思ひしまゝの山里の、ある事あらぬ世の中は、深草の奥とても、又うきよなりけり。彌生の末は、花も散りまどひ、鶯も鳴きしきりぬ。などかは、ものゝあはれの、よそになるべき。ましてや、なか〳〵に、苔ふかき草の庵の白露は、都のおきふしの馴れぬ色なるに、隙がちなる柴の戸の風は、又、玉だれのをすもる音に似るべうもあらねど、御息所の御心には、身にしみて、おぼえ給ふ事のみ、いやましぬ。

山寺の鐘、枕にちかくひゞきて、曉の夢、常に寒く、野邊の霞、軒をふかくつゝめ

そ、夕の思、毎時はるかなり。埋れながらに散る木ずゑの花、霞ながらに入る山の端の月、世をなげき、人を思ふ身には、いかばかり恨や殘らむ。なげきやかゝらむ。心づくしには、げに人も散らなむ。いたはしいかな、櫻姫。隔つと見ては、霞を怨み、歸るときゝては、雁をうらやみ、おんものおもひの、絶えまなけれど、賤機も、又、立ちつ居つ、天をながめてかこち、御坐にかしこみて泣くのみ。梓の弓の春彌生、朝の日かり、夕の月、晴れぬや人のゆゑなりけむ。

花は、殘りなく散りはてぬ。霞は、隈なく消えはてぬ。人の思は、益深く、結びに結びて、散りもせず、消えもやらず。卯づきとなれば、あなうの花のさかりなり。御息所は、うつゝともなく、夢ともなく、唯うつ〳〵と思ひつもりたまへど、賤機の心づかひは、いふばかりもあらず。自葵のかづらをつくり出でゝ、姫上にも奉り、おのれもかざして、かひ〳〵しくも、御息所の御無事を祈り、遙に宮の安全を念じ奉れど、御息所も、かたじけなしとむかりに、そをかざし給ひて、よそながら、主上の上、一の宮の御身を、心に祈り給ふぞ、あはれなる。

五月と成れど、さなきだに亂れぐるしき天。雲はかきくもり、時鳥さへまだなきぬ。

御息所の御心も靈も、斷れ／＼にかき亂れたまはむ御けしきを見るにつけて、賤機は、まづ心も安からず。常は待ちたる奥山の時鳥、今年は、心あらば、物思ふ人に、聲なきかせそと賴み、心なき雲をさへうちながめて、人の悲歎の、天にも見えずやと怨むる心、道理なきぞ、なか／＼よ道理なりける。姫も、賤機の心を知られぞ、さまでは人に、物を思はせじとおぼせど、何となげに見え給へど、蟬のなくをきゝては、殼にもなれとなげかれ、螢のもゆるを見ては、消えもせまほしとなげき給ふ、み心のくるしさは、主を思ふ賤機の、眼には見ゆるものから、おのれも、秋またぬ虫をこそ、うらやましとのみや思ふらめ。

秋萩の花さきてよりは、露もわはれも、わきても深草のやど、ものゝ思は、色に出でけり。曉の嵐吹きすさびて、尾の上の鹿の聲、さびしげなるを／＼は、御息所の御心切にあこがれ給へば、賤機も、ともねに泣くのみ。夕の雲の立ちまよひ、雲井の雁の、鳴きわたる時々は、姫の御心は、浦わをたづね、島根に通ふらむ。賤機の思も、行へを知らぬなり。長しといふ秋の夜のまの夢、姫は、幾度か、とよはた雲の大空をはせ、八重の潮路の波をわけ、隱岐に至り、土佐に移るとみ給ひて

はおぼろかれ。賤機も、又、あまたゝび、君を仰ぎ、父にも物語ると夢みては、現ならずやと、寝ざめの床をかいなづる、主従が心の中こそ切なけれ。

秋ふけて、さま／＼の草木の色の、いろ／＼に染めなすにつけても、千しほ八千しほのおん思の、いよ／＼身にしみたまへど、御息所の御姿は、嵐に露に怺へかねたる御けしきの、打ち見らるゝに、賤機は、徒に、斯くてのみながむる時ならじと思ひて、千草の色のいろ／＼、紅葉の薄き濃きを取りあつめて、御覧に入れまゐらするも、切めては、しるしなりとも、御息所のおん物思の、はかなき色にも移り給ふべきかと、思ふなる人の、柔和くも忠實なる心づくしの深き雫は、姫もまた、酌みて知ろしめせば、徒に見ては、つれなかるらむとおぼして、萩はしほらし、尾花はやさし、女郎花は、げにこそ、なよやかなれ。撫子は、上なくいとほしやと、いひさし給ひしが、何思ひたまひけむ、やよ賤機、土佐なる武文は、さぞや汝が事の、心にかゝりてあらむを、わが甲斐なき悲歎ゆゑに、昨日けふ、よしなき思ひわづらひかけたるが、われながら情の薄かりき。人のきかなむ事も苦し。親らも、今より、ふつと物思ふ事やみなむ。汝も、思ひ過ぎたる心な痛めそ。さるに

ても、互に女子となりたるが、恨ならずや。楠とやらむいふ武士と、共に千窟の城に立てこもりて、諸共に弓矢ひくべき男にしあらば、かばかりに物はおもはまじものを、えうなき女子の、力も身も叶はず、かゝる所にひとり殘りて、唯心に思ふのみなるがゆゑに、せむなき悲歎のみかゝるなり。情せばしとな思ひそと仰せて、おんぞをみ顔におしあて給へば、賤機も、おなじ思に、もろ袖の露を拂ふのみ。折りふし、天すみわたりて、望月の面白き秋の夜なり。御息所は、御簾を半捲せたまひて、つく〴〵とうちながめて、おはしたるが、

　いかにうつるわがよなるらむ深草の里の奥がの月も見るかな

あな、世につたなきわが身なりけり。汝はいかにか見るとのたまへば、賤機は、

　深草の里の奥がの月影も君ますからにうもれざるらむ

御息所の御蔭にこそ、わが世はあれと答へ奉れバ、賴母しともおぼえたまふらむ。御氣色も麗しく、そゞろに忍びかね給ふ事やあるらむ、久しく手にだも取らせ給はざりき玉琴をさへ、取り出させ給ひて、想夫戀あはれに遊バし給ふ。月は、名におふ名月。琴は、めでたき上手なれば、天はます〳〵すみわたり、露はいよ〳〵さえか





へり。天つ少女も、軒端にや舞ふらむ、吹く風の、何となう薫るけはひするも、ゆかし。げに御息所が、初めて一の宮にあひ賜ひたるも、三歳のむかし、月は今霄とおなじ名月なりき。げに一の宮が、世の中に、やゝおくれ給ふ事おはして、わぢきなくおぼしなげき給ひたる折りふし、宮の御心を、初めて御息所の慰め奉りしも、おもへバ此の玉琴の音なりけり。今宵の月は、むかしなり引く玉琴も、また、在りつる糸の音なるを、唯、きゝてし人のみは、在らぬ今宵。かれをおぼし、これを思へど、御心もかき亂れ、玉の緒の斷つ心地もせられむ。とみに琴をもひきやみ給ひて、

月かげはおなじ夜ながら琴糸のよる方もなきわが思ひかな

月のとかとはおもはねども、うちわたし給ふ折りしも、庭の淺茅にすさまじき音のきこゆ、まろむねむかり走りよりたる人。武文にて候、姫上といひたるのみ、竹緣にすがりて、ものもいはず。露にむせぶ虫のみ音高し。

文林

社頭冬月

東久世通禧

ひろまへにかけし鏡のかげよりも
さやかに照すふゆのよのつき

前田　利嗣

榊葉におくしもみえててりわたる
月かげさむきかみのひろまへ

津輕　承昭

白ひげの社のもりにかぜさえて
照かげさむしふゆのよのつき

前田　利昭

神垣のまつふくかせもさえくれて
かげふむ人もなきつき夜かな

高崎　正風

うぶすなのみまつりはてゝ神垣の
庭火にかゝるありあけのつき

池田　政禮

風さむき北野のやしろさよふけて
霜にさえゆくつきのかげかな

水野　忠敬

星が岡ひかりさやけくてらすかな
日枝のやしろの冬のよのつき

石山　基正

夕ざれた霜のおちゆふかけそへて
月かげさむしかみのひろまへ

本多　忠貫

打ならす我がかしは手の音さえて
御やしろすごき冬のよのつき

長谷　信成

廣まへのさかきのえだに置しもの
ひかりそへてもさゆる月かな

宮地　巌夫

いなりやまわけの鳥居も白たへに
さゆる霜夜のつきのさむけさ

北郷　久政

白ゆふも雪にまがひてひろまへに
さしいる月のかげのさむけさ

小田　粲

霜まよふ杉間のつきよかげさえて
ともし火くらし神のひろまへ

谷　勤

さとかぐらやゝしづまりてやま烏
霜夜のつきにさわぐ夜半かな

内藤　存守

さえてはる月夜にみれば神がきの
やそ玉ぐしもしもにまがへり

坂　正臣

落葉ふむおとも身にしむひろ前の
しもにさえたる月のかげかな

鎌田　正夫

御社のひはそがうへにてりわたる
月かげしろししもやおくらん

大口　鯛二

やひらでの音ひゞくありふけ渡る
霜夜のつきにたれまうつらん

古屋月　西川須賀雄

野分してかやか軒ばゝあれにけり
さやけき月のかげを見よとか

夜松聲　糸山貞幹

ね覺してもの思ふころぞのきばなる
松のあらしよこゝろしてふけ

野月　石丸忠胤

秋の野の千ぐさの花のいろ〳〵を
露にうつしてにほふつきかげ

日清戰爭　鹽井正男

わがせこの駒のきほひに蹌きて
ゐのこ鳴くなりもろこしの原

初秋風　大町芳衛

桐の葉の二ひら三ひら散り初めて
かぜの身にしむ秋は來にけり

斜雁　柴田顯光

大空はいかにあきかぜすさぶらん
なゝめになりておつる雁がね

住の江の種貸神社にまうでゝ　松本道別

種をかす神はいませどいかにせむ
つまもさだめぬ岸の姫松

江口とき子　佐々豊水

三瀦の里たゞへざらめや親の爲め
まことつくしの深きこゝろを

海邊月　草野隆道

松ら淵ひろくもつきのすめるかな
もろこしかけて見ゆる計りに

月前萩　　篠原　政禎

鳴く虫の聲をもすみてさやかなる
月にいろそふわきはぎのはな

社頭冬月　　鍋島　榮子

鈴のとも絶えてこほれるみたらしの
上にさえたるふゆのよのつき

蜂須賀隨子

み祓して涼しといひしみたらしに
すむ影さむしふゆの夜のつき

前田　朗子

みやしろの榊のえだにしもみえて
さすかげ寒きふゆのよのつき

柳原　愛子

いなりやま杉の葉しろく霜みえて
てるかげすごし冬のよのつき

松平　健子

秋みてし杜の木ずゑはしもかれて
とりゐ淋しくすめるつきかな

小池　道子

しもかれもしらぬいがきの榊葉に
てるかげしろし冬の夜のつき

北島以登子

五十鈴川きよき流れに澄みわたる
つきかげさむき冬のよはかな

竹間月　　諏訪　晴子

くれ竹のこの間もりくる月かげを

ふみよむ夜半の友とこそ見れ

折にふれてよめる　阿部優子

かゝる時人もこゝろをみがゝずば
御國のひかりいつぞはるべき

遠征　安東菊子

日の光いたらんきはみすめくにの
名をかゞやかせますら雄の君

瀧の下に思ふことを　尾崎すう子

瀧の糸のかゝるすみよき宿もある
うき身なかりやうき世なるらん

初秋風　鑿井てう子

この夕はきのうは葉におとづれて
身にしみわたる秋のはつかせ

山家擣衣　石田ための

おほかたは住むひともなき山里と
思ふわたりにころもうつかな

宮城記行（九月廿七日の内）

横井知萬多

渡波なる濱はたの砂、平かに見渡しよき處を、式場と定め、帆布など、ひきめぐらして、假の家となし、正面に、緑門をつくり、國旗と、會旗とをさしちがへ、其の傍に、旗など、いと多くさげ、提灯など、かけならべ、家の中央には、卓子をおきて、花など、さしたり。これなむ、水難救濟會渡波救難所の開所式の日の様なる。十二時頃、見張場の上より、餅など投げたるに、わかきはもとより、老いたるさへ、集ひ來て、われがちにと、と

り爭ふさま、いとをかし。さて、この郡長をはじめ、來集ふ人、いと多く、前には、所長はじめ、組合の會員みち〳〵たり。先、所長は、開所の詞を述べ、次に、おのれは、副總裁鍋島侯爵の祝文をよみ、次に、郡長の演說、副所長の答辭あり。次は、來集ふ人の祝詞、いと多し。そのれも、おのれの祝文として、又、よむ。式をはりて、又、餅をなげ、それより、新らしき舟にのりて、人々とともに、灣の中に出で、半ばかりの處に、錨下し、其處にて、酒宴す。この宴はじまる時、救助船は、指令船となりて、上の方にあり。其を、中におきて、白き旗さゝげ、白き鉢卷をしたる舟四艘は、左に、赤き旗さゝげ、赤き鉢卷をしたる舟四艘は、右にありて、いづれも、勢よく、下の方に競ひ漕ぎ、とく歸りつきたるもの、賞のしるし與ふるなど、おもしろさ、いはむかたなし。興、やう〳〵に、ふかくなりゆくに、岸には、これを見むとする人、山のごとく群がれり。其の中へ、船の中より、餅、なげ與へつゝ、こぎゆくさま、おもしろきに、舟の中も、ゆするばかりにて、もとの式場のありし處の岸にこぎよせぬ。

わが祝文は、

波あらき朝風、はげしき夕、帆はやぶれ、舵は碎け、進むことも、退くこともならざる沖の舟ばかり、世にあはれなるものはあらじかし。舟は、よし碎くとも、命のみはと、聲のあらむ限、救をもとむれど、岸にある人は、しらぬふりして、救ふこともなく、人はおぼれ、舟、今や碎け

むとする時、急ぎ、わが舟を出だして、其の舟につみたる何くれの物盗みとり、舟まで、引きよせ來て、わが物とすと、其の樣、海賊といふらむもの丶如し。此は是、外國のひらけざる地にある樣なり。否、わが國にも、か丶る處ありとか。わが水難救濟會は、海におぼれたる人の命は更なり。舟をも、積荷をも、安らかに救はむ爲に起したるものなれば、か丶るあさましき目見る人のなからむやうに、つとむるなりけり。今、こ丶の人等が、あつき志凝り固まりて、この一の救難所となりぬ。今より後は、小波に碎かる丶舟もなく、淺瀬に苦しむ人もあらじ。去かり。百千の船は、皆、安らかに、人を渡し、荷をはこび、漁をもせられなむ。されど、おのれは、皆人の、いよ〳〵つとめられ、ます〳〵はげまれて、わが日本の海邊は、ゆく所として、救難所をつくり出だし、いかなる所も、枕を高くして、行きかふことを得るやうに、せまほしく思ふなり。この渡波のやうに、いかに、波あらき朝も、いかに、風はげしき夕も。

けふの開所式のうれしきあまりに、おもふま丶を、かくなむ。

向島花やしきの秋草を見る記

松本道別

けふは、日曜といふ日なり。まして、ふりつゞきたる雨の、朝より名殘なく晴れたれど、ひと日を、たれこめてのみあらんも、本意なからまし。いづ

こそかとぶらはん。上野の岡は、彫刻展覽會ちふが、ひらけたりとは聞けど、今の世の下りたる工らが、つたなきわざにあと見たりとて、何のかひあらん。淺草はいかに、われ久米の平内に、文のたよりのなかだち、ねぎこふ戀もせず。大慈大悲の觀世音に、みなさけをたのむ心もなければ、肩すり踵ふまれ、塵ほこりにけがされて、ふりはへ行くべくもあらず。さりとて、遠く塵の世をはなれて、眞間鴻の臺をとはんにも、秋いまだ半にして、紅葉いろづかねど、何の見所もなからまし。こゝかしこか、どこよけんと、面づゑつく〳〵案じをるほど、案内もなく葎生の、あれたる宿おどろかすなるは、日ごろしたしき何がしなりけり。たま〳〵に天氣を、たれこめてのみやは。かしこの園生、こゝの野邊、いづくも秋の千草の、とり〳〵色さはふとぞいふなる。わけて、墨田の花やしきは、今がまさかりなりとて、人々あくがれ、とふと聞くものを、などか見にとは思ひたゝざる。いざゆかん、とそゝのかされて、さりけり〳〵、我もとく、その心なりき、とて打つれだちてゆく。

竹やの渡より、舟にのりて「すみ田川をさかのぼること、いくばくもあらで入りぬる磯に、棹さしとゞむる所なり」と、むかしの人の、まをしおきけるぞと、寺島の入江にて、舟よりおり、白鬚の森を左に見て、四丁ばかりゆけば、ほそきを川にそふて、まがきゆひめぐらしたるなむ、それなりける。籬のそとには、小萩さきみだれて、流にふし、は

や秋のけはひしるけし。門さし入れば、はひりのあたり、塵もすゑじとかきはらひて、こゝらなる梅の幹だち、物ふり苔むしたる、世の常ににず。碑文のあやしげなる歌俳諧も、こゝにはおもしろき心地す。園生は、はたむりひろくて、石のたゝずまひ、池のさまなども、わざとならずおきてゝをかしきに、梅の下かげ、池の汀に、かの、山上の憶良がよみおける、「秋の花」を花葛花、なでしこの花、女郎花、また藤ばかま、朝顔の花」、のさくさ、入りみだれて、うるはしく咲きいでたるは、唯、いくむらの錦を、まきたらんやうにて、春の花の色香にも、おとらぬ心ちこそすれ。萩は宮城野の種を、うつしゝと聞く。花房おほきやかにして、長くたれたる枝もたわゝに、おける白露

の、さはらばちらん姿、なかなかにあはれ深しや。女郎花は、たけ人のせにあまりて高き、野山のたぐひならねど、さすがに、なまめかしく、なつかしげなれば、花山のすき者の、おらましかど、落ちもしぬべし。たゞ、なよなよと秋の野風に、うちなびく汝が心ひとつは、誰によするかど、我もきかまほし。薄は、築山のもと水のほどりなどに、いや生ひしげりたる、遠き野山のさま、おぼえてゆかしきに、靡くけはひの、ほにいでゝ招く袖と、見ゆるもをかしく。げに「尾花がうれを秋とはいはん」と、いにしへ人のいひしは、ことわりとこそ覺ゆれ。さるを「植ゑてだに見じ」とは、いかなる人の心なりけん。藤袴は、たがぬぎかけしかたみなるか、忘られがたき香にはほへり。常

夏にうつろはで、今に咲きかゝれる、からやまと撫子。はた、朝な〳〵に色あらためて、盛ひさしき、朝顔の花も、にくからずにほひ、風のまにまに、ふきかへす葛のうら葉は、うらめづらしゝ。そのほか、桔梗刈萱、いづれゆかしからぬぞなき。あるじ心ある人にて、めづらかなる木、うたがはしき草の名どもかきつけて、和名抄にはなに、本草にはくれなど、引きたるころ、殊にをかしけれ。

あちらこちらと、さまよひありけば、千草のにほひ袖にかほり、虫の音耳にきよく、身はこれ、廣澤嵯峨野に、逍遙したらん心ちして、時のうつるをおぼえず。

　廣澤も嵯峨野の秋もかくやらむ
虫のなくねも花のにほひも

さき匂ふ秋の千草にいりみだれ
　花摺衣きてやかへらむ

とよひいつれば、友なる人、

ひろ澤もさが野の秋もあつめたる
　こゝにすみ田の宿やからまし

ともに、つたなきすさびも、折からの興なりけり。

かくて、酒たうべなどしつゝあるほど、日影やうやう傾ぶき、入相つぐる鐘の音、きこえ來れば、

　花みつゝ暮れなむ鹿の宿ときく
　　小萩がもとをまきてねなまし

されども、花摺衣を、夜の錦になさまくをしさに、家路たどりぬ。



月のあかき夜友を訪ふ

竹園女史

現身の世のことわざに、いとまなくて、此日頃おとづれざりし、根岸の里に住る友許問せやと思ひ立て、夕づかたより家を出て、たどり行なぞに、月わかうさしのぼりぬ。打日刺都の内とはいへぞ、此わたりは、もの靜まて、道のべの草におき渡す露の光り、さては、なき出る虫の聲、とり〳〵にをかし。程なくかの庵にいたりぬ。主人の翁の常に好める笛の音の。くまなき月にすみ渡りて、所から哀深し。おどろかさむも心なきわざと思ひて、とみにはえもいらず、垣の外にたゝずみ居り、そかをはるをまちて、

くれ竹の根岸のさとのつきの夜に
ふしおもしろき笛の音ぞする

かく口すさびければ主人聞つけて、

笛の音にこゝろひかれてくれ竹の
ねぎしのさとを君やとひけむ

といひつゝ、自ら出迎て、いざなふかたみに思ふことゞもかたらひかはすかたはらに、をさなき女のありけるが、琴取いでゝ「をしかなく此山里と詠しけむ、嵯峨のあたりの秋のころ」と聲うるはしくうたひ出たる、折にあひて、興あり。猶、あかぬものから、いたく夜のふけゆかむも、心もとなし。いざ、まからむと、いへば、主人袖をひきて、

さやかなる月を愛つゝ夜とゝもに

と、いひかけゝれど取あへず、

君が宿にてかたりあかさむ

かく答て、又、さらに、昔今のものがたりに、時をうつしぬ。まどろむひまもなくて、曉つくる忍が岡の鐘の音におどろきて、あたりを見るにほのぼのと明行空に霧立渡りて、いひしらぬ秋のけはひ、立出むこゝちもせねど、さのみやはとて、袖をわかちぬ。

きぬ〳〵のわかれにまさる我袖の
露をあやしとひとやとかめむ

落葉

塩井ふく子

何にいざなはれけむ、ふとおどろけば、さや〳〵とおとして、庭の淺芽をふみわくる人のけはひす。あな、誰にかあるこよひくべき人ありともおぼえぬを。いぶかしと耳ひきたつれど、いかにかまけむ、おとはやみて、またきこえず。さては夢にやありけむ、おぞやといひて、衣ひきかつぎて、ふたゝびまどろまんとすれば、又、さや〳〵とおとして、戸をたゝく聲、ほと〳〵と聞ゆ。やをら身をおこしてうかゞふに、やれ戸の隙、あからはかげさへ見ゑ、なほもくりかへして、戸をたゝくひゞき、ほと〳〵ときこゆ。あな誰ぞ、夜ふかきにといひて、やゝ戸おしあけたるに、いましものぼりけむ月の光の、かすかに木の間をもるならでは、ほかげもなし。なほ、二聲三こゑ、誰ぞ〳〵と呼べど、更にいらへもあらじ。また、さや〳〵とおとたてゝ、ひた〳〵とわらふけはひす。あやしとおもひて、女の童をよびおこして、もろとも

におりたちて、折戸のかげ、前栽のおひだ、そここゝとなく、たづねたれど、人のかげはさらなり、それかと思ふかげもあらず。狐狸のたはむれたるにやなどのゝしりて、さすがに、月の、いとをしさに、いりもやらず、たゝずめバ、をりふし峯おろす風、さやさやとひゞきて、軒端のこずゑ、はらはらと、ちりかゝる音に、心づけど、木の間がくれ、遣戸にうつる月かげは、又、はかげのいざやうごとく見えぬ。

雜報

●御救恤　去月十一日、暴風雨の爲、島根、鳥取の兩縣に、非常の水害ありしを、憫然に思召され。　天皇　皇后兩陛下より、御救恤として、金二千圓を島根に、八百圓を、鳥取へ、下賜はりしと承りぬ。庶民は、定て、　聖恩の仁慈に感泣せざるものなかるらん。

●御菓子御寄贈　天皇陛下には、此の程、　皇太后、皇后兩陛下の御許へ、御菓子數多御寄贈遊ばされ、去月二十八日、兩宮中に到着せし由なるが、右は、廣島市にて有名の菓子商某が、我が、國の砂糖のみにて謹製せしものなりと承りぬ。

●女子高等師範學校規程　は、昨日、文部省令

第廿五號を以て發布せられたるが、右は、前井上文部大臣が、未、其の職にありし頃、高等師範學校規程制定に意を注ぎ、男子部に關する規程は已に、其の在職中發布したれども、女子部規程は、未、其の運に至らざりしかど、爾後、引續き、取調の上、今回、發布せられたる次第にして、高等師範學校規程は茲に至りて、初めて、完成を告げたるものなりと云ふ。

文部省令第二十五號

女子高等師範學校規程を定むること左の如し

明治二十七年十月二日　文部大臣芳川顯正

女子高等師範學校規程

第一條　女子高等師範學校の學科目は倫理、教育學、國語、漢文、歴史 地理、數學、理科、家事、習字、圖畫、音樂、體操とす

前項學科目の外外國語を隨意科とす

第二條　女子高等師範學校の學科は尋常師範學校女子部の課程に照らし更に一層精深なる程度に於て教授するものとす

第三條　修業年限は四ヶ年とす

第四條　第四年級生徒は附屬學校及幼稚園に於て實地授業及保育に從事せしむべし

第五條　女子高等師範學校生徒は左の資格を有する者より地方長官之を薦擧し學校長に於て試驗の上選拔するものとす但臨時に缺員を補充するの必要あるときは明治二十六年文部省令第十一號に依るべし

一　身體健全品行方正にして教員に適當なりと認むる者

二　尋常師範學校二箇年の課程を經へたる者若は之と同等の學力を有する者

三　年齡十六年以上二十一年未滿の者

第六條　入學試驗に及第したる者は一定の期間假に入學せしめ其の資性品行才能を審察し適當と認むる者に限り本入學を許すべし

假入學の生徒は自費とす但本項は明治二十八年度より施行すべし

第七條　生徒在學中疾病に依るの外自己の便宜に依り退學を願ふ者は支給せられたる學費を償還せしむべし

卒業の後正當の事由なくして服務の義務を盡さゝる者亦前項に同じ

文部大臣は其の情狀に依り前項償還すべき學費の全部又は一部を免除することあるべし

第八條　尋常師範學校女子部又は高等女學校敎員たるの志望を有する女子にして女子高等師範學科中の一科目若は數科目を撰びて學修せんとする者は選科生として入學せしむることを得

第九條　明治十九年文部省令第十七號を廢す

文部省令第二十五號參照

明治十九年(十月十四日)文部省令號十七號は高等師範學校の學科及其程度なり

文部省令第十一號(明治二十六年八月五日)

高等師範學校及女子高等師範學校に於て生徒の缺員を臨時補充する必要あるときは文部大臣の許可を受け明治十九年文部省令第十八號高等師範學校生徒募集規則第一條乃至第三條の規程に依らず學力年齡當該學級に相當の資格ある者を募集し試驗の上入學せしむることを得

●育兒會の美擧　大日本婦人共立育兒會は、元來、貧困者の病兒を救療せんとて、普く、有志の婦人より多少の義捐金を募り、有栖川御息所殿下を總裁に仰ぎ、鍋島侯爵夫人を會頭に推して、會員も、既に、三千餘名に及び、救療せる病兒も少からぬこととなるが、去月廿六日、會頭鍋島侯爵夫人は、同會の幹事の人々を永田町なる自邸に招きて、此度、國家の爲に、遠く、征淸の役に從へる、我が忠勇なる軍人の遺族の中に、小兒にして、若、疾に罹るものあらバ、兼て、特約ある醫科大學內小兒科に照會し、會費を以て、之を入院せしめ、懇切に、救治の道を施し、從軍者をして、聊、憂慮

することなからしめんとの事を謀られたるに、一同は、喜びて賛成したりしかど、愈、之に着手することゝなりしとぞ。かゝる美擧の一日も早く、實行せられんことこそ、吾人は、切に、望ましけれ。

●山本大尉の夫人　山本大尉の平壤の役に勇戰して、名譽の死を遂げたるも、嚴父、令閨の勇壯なるによりてなるべし、夫人、名は春子、舊會津藩士遠藤嘉内氏の女なり。春子の令兄は、仙臺第七十七國立銀行の頭取遠藤敬止氏なり。春子は武門の家に生れ、維新の前後に勇名ありし會津藩のことなれど、幼少の時より、女ながらも、武術の嗜も深く、明治十年西南の役に當り、春子は、女隊を編成し、従軍を願出でたれども、幾もなく、亂平ぎて出軍に及ばざりし、其の當時、東京府知事より、春子に與へられし賞詞には、

第五大區五小區北富坂町三番地
嘉内娘　遠藤ハル子

昨明治十年鹿兒島縣下賊徒征討の節従軍願出之趣陸軍省へ開申致置候處當時賊勢漸次退縮不日平定に及候間何等の沙汰に不及候得共國家有事の際身命を抛ち報効致度段奇特の事に候旨同省より達相成候條此旨可相心得事

明治十一年六月十八日
東京府知事　楠本正隆　印

と、此の一事にても、春子の氣丈なるは知らるべし。春子の忠知氏に嫁ぎしは、去る二十年の事なりしが、平素、最睦くして、家內、誠に、能く治り、知る人皆、之を稱しあへり。今回、大尉が戰死し報至るや、野津師團長大島旅團長の令閨

を始めとし廣島にある各將校の妻女は、吊慰の爲に、春子の許を訪つれしに、春子は、流石に、平生に變らず、平生の行軍すら、門を出れバ、良人の歸るを期せず。況して、今度の戰爭には、初より、生きて歸るを待たず。戰死は、軍人の名譽と存すれども、唯　天皇皇后兩陛下より平壤を乘取たる軍隊へ、御嘉賞を賜はりし、其の電報を拜せしめざりしは、誠に、殘念の事なりとの答に、人々、覺えず感涙を催ふせりとぞ。又、春子は、良人出征の後、野津師團長の宅に於いて、他の將校の妻女と看護法、繃帶學を修め居たりしが、良人戰死の報あり、其の葬儀も了りし後は、徒らに恩給を受て、安居するは恐れ多しとて、大尉の嚴父とも、談じ合て、篤志看護婦を志願し、些、病兵の救護に力を盡くしをれりとぞ。聞くも感嘆に堪へざることにこそ。

●福羽子爵の演說(つゞき)　尙申せば「御」の字なぞを樣々に多く使ひますけれども、本當の文章を書いて御覽なされよ、「御」の字は　天子を敬するに限る言葉であるを、　天子を敬する意で、將軍も敬せねばならぬ。將軍を敬する意で、主人と賴む所の者をも敬せねバならぬと云ふやうになつて、「御」の字を澤山使ふて、澤山喜ばせることである。斯う云ふ言語の使方はない。けれども人に教へるには、一朝一夕ではゆかぬから、即今お止めなさいとは言はないが、人の惡しいと思はぬ丈けには改めねばならぬ。さうすると「御」の字が少ないから、人に對して言

語が横柄になつたとか、粗末になつたとか思はぬが宜しい。「御」の字を使はなかつた所か、我には我の意思があるから急に破らぬが宜しい。天子を敬禮するには、又人の動作と云ふことは極大切のことであつて、人の品格が是に現はれて心の見ゆるものである。言語動作と云ふものは、我心の形を現はすものであるから、心は繪にも筆にも取りやうはないが、言語動作で心が繪に畫いた如くに見ゆるのである。故に言語動作は愼まねばならぬ。愼まねばならぬけれども、其愼み方にも又度があつて、德義ある人、又目のある人は、動作の有樣を見て居るから、チヨットは宜しいけれども、具眼の人は本當に彼れは高い人であるか、心の高尙の人であるか、理の當然を見て居る人であるか、ないかと云ふことを見るからには、恭敬の動作に、諂諛の動作は止めねばならぬが、高尙の動作と云ふものを敎へる禮式がない。我身も禮式のことは、隨分骨を折つたことがあるから、此校中には福羽がアー言つたと云ふことを御存じの方もありませうが、禮式と云ふことは、起さうとしたり、止めやうとしたりしたことがある。之を起さうとすれば、德義のある先輩のお方を賴まにやならぬ。其先輩は文化文政時代のものであるから、古昔の禮式には明かであるけれども、文明國の禮節を起さうとしては、殘念ながら出來兼ねます。起さうとしては殘念であり、起さうとしては殘念でありまして、未だに其心を持

つて居りますから、今でも禮式のことを寝床で論ずるやうなことが度々でござりますが、實に此禮式――禮式と云ふことに至らずとも、人の動作を衣服身體に愼まねばならぬ。先づ人の度の高くある低くあると云ふことを一箇條申せバ――此一箇條も何處を引いて宜いか知りませぬが――先きのお話續きもござりますから、陛下の行幸を拜するときなどの、身體の度に就いて述べませう。あれも小學の掛圖などには、誠にどうも眼も當てられぬやうな殘念なることがある。それは　天皇陛下に對してのことである。　陛下の御通輦の時、前驅の方に目を注いで、　陛下の御車の方に目を注いで居りませぬ。あの敬禮は封建時代の「下に居らう下に居らう」と言はれて、拜する人の顏は下に向けて居つた習慣でござりますから、其敬禮を以て、天皇陛下を拜してはならぬ。あれは繪でござりますが、繪圖は繪圖と思ふて、敎へる人は其心して人に敎へたいものと考へます。そこで　天皇陛下の行幸は、前驅の者があつて　陛下の通御を示す旗があれども旗、旗にあらずとも　陛下の通御を示したる方に正しく立つて　陛下の通御の時は正しくシャッポを擧げ、其目を正しくして　陛下の方を見ながら拜するやうにせねばならぬ。迂濶に敬禮しては相濟まぬ。道よ拜すると云ふ以上は、其方に目を注がねバ拜したにはならぬ。先きに武家の通行を拜んだやうに、どの御車がどうだやら知らぬ位のことでは、拜し

たと云ふものではない。其處に出て居たまでの話であつて、本當の拜禮にはならぬ。それで此大道を愼まねばならぬ。是は一事であるが、此の如く人に向つて敬禮をしたり、人と交をするには、人の方を見定めてせねばならぬ。見定めるには、あなた、何某樣、或は何某と云ふた通りに、當る位の敬禮を盡さねば、敬禮の道ではない。それから察して御覽なさるときは、ナカナカありますけれども、從前の如く、身を卑下して是が敬禮の道であるとは思はぬが宜しい。又我れ物知り顏の擧動をして見せるは、是は行の缺になる。さうならぬ樣に先方に向つて言ふので、さうしまするのに手近い例がある。人を敬するにも、敬する言葉を使ふことは宜しいが、

今までは下に向ふと、敬することなくして權柄の言葉を使つて、上下を判然せねば區別が付かぬやうに思ふが、われも言語の缺である。彼の中等の身分なれば、中等の人が五七人集つて居つて、其一部の人に向つて格外に敬禮し、他の人には冷淡にし、又橫柄のことをする。上の人に向つては敬禮し、下に向つてはどうも不敬禮のみならず、却つて權柄にする。其心はどう云ふ心であるかと云ふと、誠に心はまづい心であると云ふことを察せられる。相互の身體の度で、やはり心の形が知れますから、言語動作は愼んで往かねばならぬと云ふことを申さねばならぬ。是から斯の如きお話を摘んで述べれば限りもないから、先づ努めねばならぬ大小を述べま

すが。大なる努めは、忠孝を心に存し、人の交を爲すことを心に存して、所謂懶惰のことのないやうにせねばならぬのが人の道である。其務めと云ふものは、人々の度合々々に依つて、各〻違ひはありますけれども、一を推せば十も知らるゝ道理であるから、女子の務むべきことの一端を述べますれば、務むると云ふ心はありながら、其務を形に現はさねども、務めたのではない。其形を現はすに、人に見える所に現はすのと、人に見えぬ所に現はすとの二つある。茲は誠に人の徳のある、ないを心に確める道理でありますが、見えない所と云ふことの例は小さい事のやうであつて、斯う云ふ席で申すのは、實は申し過ぎるやうではありますが、喩へに取つ

て一言述べます。一家の交と云ふものは、家内の交のみならず、廣く人に交ることを力めねばならぬから、客に接すると云ふこと、或は馳走をする――饗應をすると云ふ接し方もある。先づ今日馳走はなくとも、心にある所の誠を以て款待すると云ふ道理はなくてはならぬ。其款待をして、心の誠を顯はすは、一家の心を一致して其客に接するやうにある。招待をしたとか心の盡し方が宜いとか、是等は誰が誰もにするかと云ふと、一家の主人たるものは、大事件には關係するけれども、小事件には及ばぬ。其小事件に及ぶのは、即ち一家の婦女子である。其婦女子と云ふものは、家事のことに就いては、能く心を掛けて、あの事もよく

あれかし、此事はよくあれかしと注意して居らねばならぬ。客に對する所の準備も下女に云ひ付けばなしで置く人がある。一家の婦女子が餘りコセ／＼するのも宜しくないが、客に對する禮に適ふやうにするには、あの所は掃除をよくしろ、此所は奇麗にして置かねばならぬ。或は饗應すれば、饗應の禮に適ふやうにせねばならぬと云ふことを言ひ付ける。或は物の汚穢てあつたり、汚れてあつたりするやうな所を奇麗にせよと命ずるけれども、淨らかにせよと命じたのみで、形を運ばずに居ると云ふ道理もある。客に對して禮を盡すには、唯下婢に斯うせよと命じて置いたと言ふのみで濟むものではない。やはり淨らかになる所は、自から知つて居つて、淨らかにせよと言ふた所は、淨らかになつて居るやうにせねばならぬ。今では中等以上の人を、俗に惡口に鷹揚のことを大名と云ひますが、是は言はゞ人に横柄に事をするからのことである。アー云ふことは、家を治むる所のものは愼まねばならぬことである。又何でもない事で人の意を表させることがござりませう、是もちいさい事でござりますが、其ちいさい事の極點を申して見れば、人が來ても煙草をのむのが一番先きであるから、そこへ煙草盆を出すことにも注意する。今の煙草は今の煙草で、いろいろのみようがあるから、煙草盆を出すにもそれに應じてしなければならぬが、それは先づ擱いて、煙草をのむ人があれば其煙草盆の吸殻を

移す所の灰吹の中に水を入れて置いて、チユッと言つて消へれども亭主も心持が宜し、側に居る者も心持が宜いが、それがむさくるしくて、そこに至らぬと云ふと、亭主も心持が宜くなし、側に居るものも宜くない。それと云ふものは、其配偶者自らが働かずに居るからのことである。是は極くちいさい事のやうであるけれども、人に交を爲す以上は、斯樣なることは、種々樣樣百端千端あるから、其小なる愼を爲すものは、必ず大なることにもおろそかはないのである。大なることばかりをすれども宜しいと云ふものがあるけれども、それは豪傑肌ではあるけれども、豪傑肌も眞似て宜い事もあり、又宜くないこともあるから　誠に考慮しなければならぬことである。結局行の勤勉と云ふことは、是非ともどうぞ心に掛けて勉めて致したいと云ふのが、即ち大小の勤勉、

それから其大小の勤勉に對して、離れぬものは家の整理と云ふことである。家の整理と申すものは、即ち一家のとゝのひを爲す道理であれば、各〻自ら磨いた所の心の徳義が其時現はるゝである。學問をした人は、其學問から一家の整理の成立を思ひ、又心に益ある人に交つて、益徳を得れども、其德は一家の治まりに就いて發せねばならぬ。人の道を以て、即ち此日本と云ふ國は、百王一統に續く天然の資格のある國で、何萬年となく續く資格のある國であれども、萬民が此國を助ける如く一家を治むる際には、或は家

の賄を任せられてする以上は、萬民が此國を助けると同樣に、其家を助けねばならぬ。それには必ず學問のみならず。心の智識、即ち學び得たる德を授けたりして、家を治めて往つて、段段教育の益をも其時爲さねばならぬ。學校は學校時代に習ふたことであつて、其德か段々皆回つて來て、學校時代の德が這入るのは當然のことである。家の整理と云ふことで、之を名けて申せば、即ち天然の性と、人の學んだ德とを合せて、一家を治むるのであるから、數限りもないことでありながら、是は一々其心を同はして見ませねでは、家の治まりと云ふものは整はぬから、貧富度合は違ふとも、人たる道を失はぬやうにして置き、己れ若し其位置に往かざると

も幼少に教へて、其教を爲すべき道を、遂に爲させる位にして、其家に益を施さねば整理と云ふ譯ではないのであります。今日の人は不注意がないやうにして往けば、整理のやうであるが、是は本當の整理ではない、當座の整理といふやうなものである。整理を爲して、家に德を爲すは、女子の任であるから、女子は深く心に擔當せねばならぬことゝ考へます。是が家の整理、それから末段の力ある和合、和合と云ふものは則ち一家が先づ治まつて、不平もなく、兩親も所を得、子弟も所を得て先づ〳〵睦しく暮すのが、即ち和合と云ふものである。又和合も小分けをすれば段々ありますけれども、第一男女の和合と云ふものは、誰しも能く言ふことで、男

女の和合と云ふことを存すれば、一家の和合と云ふものは積つて成るものである。一家の和合と云ふものは積つて成るのに、當座和合を爲すも宜しい。それも惡しくはないけれども、其和合と云ふものは、和合したときの有様に依つて、和合の名を附けるので、此和合を他から動かされないもの、己れも動かぬもの、斯う云ふ力ある和合と云ふものを心に掛けねばならぬ。夫たる者のある身は、夫たる德を全うさせるには、其夫の德を全くさせて、力ある和合をさせねばならぬ。我身一人は斯の如く夫に能く事へるに、なぜ夫は我を捨てるであらうかと云ふ人がありますが、是は夫が惡るいと云ふ道理が一つありますけれども、我が盡す和合が、力ある和合を求めずして、當座の和合を求めてする道理であるから、苟も夫婦たるものは、必ず力ある和合を計るべきものである。又事を爲さうとするにも、其力をお互に計つて見たり、聞合せて見たりするのは、力ある和合の道理ではない。當座の和合は十分和合心を含んで居ながら、力ある和合が出來ぬから、ツイ離婚を求めたり、爲したりする道理である。玆に又注意して婚を求める以上は、素より注意はして居るでござりませうが、如何にも力ある和合を爲すには、其目的を立てねばならぬ。而して此力ある和合を爲すには、其養ひ方によりて眞の和合を爲し、家の幸福を増し、其身を全うすることが出來る。それを爲し得なければ、人の德の全い

と云ふものではあるまいと考へます。丁度それを爲さうとするには、日本の昔からの沿革に依つて見れバ、時代々々に沿革の有樣があつて、其時の風儀があるものでありますから。唯今の風儀は、古來の風儀とも違ひ、今の有樣はチヨットト出來事の風儀が多い時である。併ながら心に德を搆へやうと致せバ、今日の有樣は、今日の有樣で爲すやうに致すが宜しいけれども、五十年たち、百年たつて、日本の有樣は斯くならねバならぬもので、斯くあるべきものであると云ふ道理を先きに知覺して、各々の心にそれを貯へて居て、將來の此日本の景况に對して、其時に行當つて、和合の破れないやうにせねバならぬが、其時と申せバ、今にも時が來て居りますが、

追々法律も明かになり、民法も布かねバならぬ時期が來る。はや民法は出て居りますけれども、人の德に關することゝ云ふものは、急に布かれないから、實施されないか、民法は一家の財產の分配から、子に對する義理合ひ、夫婦の義理合ひ、それ〳〵一家の財產に對する整理方と云ふものは、將來必ず起らねバならぬ。今より夫婦にならうとするものも、一家を和合しやうと云ふのも、子孫の爲に後々を思はねではないけれども、將來日本の景况は、どうであらうと云ふことに人の考が及バぬから、又それを及ばさねバならぬが、財產の分割、分配法から、或は子に對する道、夫婦財產の區別等も附けねバならぬ。さう云ふ事等に對して、夫も過らぬや

うにし、己れも勿論過らぬやうにし、子孫にも益德を得さするやうにするの和合を圖らねばならぬ。此和合力は、一村の和合力になり、一村の和合力は、一縣の和合力になり、一縣の和合力は、日本全國の和合力になるかも知れませぬ。そこで此和合力は誰が重もに擔任するかと云ふと、夫たる者は行渡り〳〵であるから、女子たるものゝ擔任すべきことで、女子は其和合を圖るべき衝に當つて居る故に、今にも教育を受け、而して人に教育を爲さうとする所の女子は、尚更之を愼むべきものじやと云ふことを、心の中に一生蓄へらるゝやうに致したいと考へまして、爾か述べました譯でありますが、爾か申す其所以は、前に申した通り、維新前の忠孝の景況と、維新後の忠孝の景況の違ふ如くに、此和合力の違方があるから、此効力のある一家善い和合力を圖らんとするものは、則ち此明治時代に適當した婦德のある人となることが出來る。それで此明治時代に適當した婦德のある人に爲さしめたいと云ふのが、我輩の素志である。故に老の身の斯く入齒を以て不束の口上を述べましたのは茲である。

斯く述べました五箇條の先入の注意と、言語動作の有樣と、それから彼の大小の勤勉と云ふことには、之を一緒に爲すべきものと、一片のものとあつて、又大小の勤勉と云ふことには、老年の時も、若い時も皆籠つて居りますから、大小の勤勉から引いて、又一家の整理と、力ある

和合と云ふ事になりますが、大小の勤勉と云ふことは、両方に使つて全うしたいと考へます。是で五になりますが、先づ考ふる所の順序を立つて述べました譯で、小分けをして、委しく述べれば限りもないことで、又我輩も述べたいですが、今日は是で止めますから、どうぞお聴取になつたことは、聊かなりとも、我身に行ふやうにせられたいと考へます。　（をはり）

●左に掲げたるは、信濃なる諏訪神社下社へ獻詠の歌どもなりとて、年廼舎ぬしより贈られたるものなり。

明治廿七年八月二日諏訪神社下社獻詠

水邊荻　　従三位子爵　諏訪忠誠

みつうみのなみしづかなる汀にも
たゆす音なふをぎのうはかせ

従五位源　忠元

よる波のきし打つ音にまぎれぬは
みぎはの荻のそよぎなりけり

晴子

さゝなみにおとうちそへて汀なる
をぎの上葉にかけわたるなり

宮司正七位　岩本尚賢

すみかへる水に移ろふかげみれば
そよかぬ荻もさびしかりけり

禰宜　矢島正守

かせそよく汀のをぎのともすりに
水にはしらぬなみのとそする

主典　小平啓三郎

船人のゆめさますらんよもすから
かはかせさわくをぎの葉音に

同　桃井保之

きく人のたもとに露そこぼれける
みたらし川のをぎのともすり

岩波冲人

行水の瀬のともあきはすみそめぬ
をきの上葉のころやそふらん
増澤　靜雄

いなつまの影に流れのはのみえて
川つらさびしをぎのかみかせ
林　守本

淀みなくなつはながれてはや川の
みぎはのをぎに秋かせぞふく
小松　千歳

風そよぐかはべの荻の志げみには
上葉のつゆもなみかとぞみる
判事從七位　小林竹太郎

いとはやも月日なかれて川そひの
をぎの上葉にあきかせそふく
權大教正　小山　進

つゆはらふ荻の葉風やさそふらむ
水のおとさへあきめきにけり
菅沼　屯

行水も今朝すみそめてたつあきを
はやくそつくる荻のうはかせ
千野　方義

よる波の音にそまかふいつしかも
秋にいりえのをぎのそよぎは
山田　正倫

洲羽の海の波はさわかぬ秋かせを
荻の葉にみるけふの志づける
中島　基重

涼しくもそよぐかはべの荻の葉の
おとにそ志るき秋のはつかせ

（未完）

發題

十月二十日
歌……月前菊
文……女德の說

十一月五日
歌……天長節
文……立冬

教の庭

十月五日兼題　新嘗祭

（天地人のほかは原稿到着順なり）

天　愛知縣寶飯郡下地町　永井さい子

身みづからにひなへまつるみ心を
うましと神のまづきこすらん

地　熊本縣菊地郡城北村　澤田春子

皇神のめぐみにみのるたなつもの
さゝげてまつるけふの樂しさ

人　廣島市稲荷町　香川穎子

今日こそは御饌に作りて備へてむ
とよとししるき秋のみのりを

寶田の千代のはつほをおほきみに　青木はる子
さゝけて祝ふけふのみまつり

祈年のしるしたふときとよわきの　石井德子
にひほをとりて祭るけふかな

かんながらつたへつたへし新嘗の　佐々有隣子
まつり仕ふるけふぞかしこき

五十鈴川清きながれにみそぎして　德永滿壽子
にひなめ祭るけふのゆたけさ

あめつちの神に初ほをさゝけつゝ　菅谷こう子
祭るけふこそめでたかりけれ

此の稲を君がきこすときゝつれど　竹内淑子
さゝけし人はいかにうれしき

この秋もみのり豊かとたなつもの　羽田三緒子
神にさゝくるけふのみまつり

大君のかみをまつらすたふとさに　羽田千世子
ふくるしらぬけふの新なめ

年ごとにみのる初穂のけふはしも　碓井　信子
かみの御前にたてまつるなり

すめらぎもわきの祝をきこしめす　高作　貞子
最もかしこきけふのみまつり

にひしねを神にさゝげて豊かなる　諏訪　晴子
年をとも／＼いはふ今日かな

かけちから五十鈴の宮に備へつゝ　宇多　揚子
豊けきわきをいはふ今日かな

すゑながく民安かれとたなつもの　吉田　芳子
神にさゝげていのりますらむ

はつ穂をは備へ給ひてかみ／＼を　江馬　信子
祭りますこゝろたふとかりけれ

御惠のつゆにみのりしはつほこそ　鈴木　秋子
まつ九重にたてまつるなれ

新嘗のゆにはのすきのゑはかきに　土屋　てい子
みよのかゝみとてれる月かけ

天地のかみをはじめてかしこくも　川瀬　ゑけ子
みづほゆたかに祭るけふかな

年毎にけふぞたる日どとよだけの　川瀬　きく子
かみにさゝげて祝ひつるかな

わせおくてよくみのりけん産土の　鳥山　龜子
新なめまつりにきはひにけり

にひなめの今日のまつりは千早振　降田　槇子
神代ながらのみわざなりけり

畏くもすめらみかみにたなつもの　高橋　政子
さゝげて祈らすけふのみ祭

幾千秋ゆたけき御代のためしとて　山田　先子
はつほを神にさゝげまつらむ

ためしなき瑞穂のをしね聞食せと　藤澤　元子
皇おほがみにさゝげますらむ

初しねをかみにさゝげて皇ぐにの　山田　繁子
いややすかれと祈りますらむ

あなたふと我が大君はかみながら　土生　清子
神にはつ穂をさゝげまつらむ

すめらぎの神のめぐみを仰ぎつゝ　上野　兼子
豊のはつ穂をさゝげますらむ

秋の田の稲のみのりをおほきみも　高井　米子
かみの惠みとさゝげますらん

ゆたかなる年のためしに初しねを　小野田信子
皇おほがみにさゝげますらん

十月五日兼題　紅葉狩の記

天　松山市鐵砲町　鳥山龜子

青きをもおきて玄のぶとうたひしはわさき麓の色にしてわけいるまゝに峯の櫻谷べの楓露にそみ時雨にもみ出て紅の色ふかう見えわたれるこま錦ともいひつべけれどそれも今はことふりたれバたくへん物だにもなし秋はみ山といひしもげにさることぞかし夕日の影に一入の色をそふるまで立さらずふかく心にそめて見愛でたれど猶一枝二枝手折りつるはわかぬあまりの家づとなりけりあはれ大かたは松のみと思ひ捨にし去年の秋こそ今はくやしかりけれ

地　熊本縣菊池郡城北村　佐々有鄰子

今日は日曜なれバたれかれとなく業をやめて茸がりするあり川瀬にさび年魚つるありおのれは心あひの友ふたかたみかたうちつれて官幣中社阿蘇神社に詣でゝみやしろ近き小嵐山に登りてみわたせバ谷もみねも日本錦の幕ひきめぐりしたるかと驚かるゝは時雨に霜にそめつくしぬる木々の梢の紅葉にあんありけるあなめでたあなうるはしぬさもとりあへずと聲のかぎりうちあげつれバかたへの木かげより誰ぞたびと音なふ人あり是なん阿蘇男爵の姫君たちの紅葉狩のむしろにて面はづかしさかぎりなけれど歌もよみ得ず坂路をすべりてかへりぬ思へどわれながらわなみにくゝはしたなきや

人　長野縣長野町　吉田芳子

都人來ても見よかしと云ひけむ古人の言葉を思ひ出て早山里は紅葉しぬらむとはいやと思ふ折から隔てなき友垣の訪ひ來て昨日しも賤の嫗よりかねて約しおきたる戸隠山の紅葉今を盛りときゝ侍りぬいざ給へと誘ひしかど共に宿を立ち出つさて見渡しの山邊は紅の雲のたなびくかと疑はれいと

美しけれど足の痛も覺えずけはしき山路を急ぎつゝ分けのぼり見渡しよき芝生をとめて茲に休ひぬ自然ながらも妾が爲めに設けたらむさまにて嬉しとも嬉しさて遠近を眺むるに數多き楓は霜に醉ひ時雨にそみ松にかゝれるかつらさへ色づきてさながら錦の幕を打ちわたせるが如く花よりも紅なりとはかゝる樣をや言ひたるならむなど罵りあひつゝしばし見惚れてありしがいつか夕日は斜に照り渡り麗はしさ一しほまさりて愛たき心のやみがたけれど此まゝにてあらまほしなど語らふ折しもふと物音に驚かされて後を見れど賤の翁の佇みて謂出づらく

孃等そも／＼今日を如何なる日とか思ひ侍る雞林の風吹きたち鴨綠の河波立ちさわぎし此方恐多くも畏き御方を始め諸の司に至るまで日夜をわかす事議りにいそがはしく況て武士は遥けき波路をこえて彼地に渡り矢丸の雨を凌ぎ刃の林をくゞりて紅葉にまさる紅の血しほを流しつゝ義も理も知らぬ異國のものとも討ちこらし御國の光を輝かさむとし給ふときにあらずやさるを月にあくがれ花にたはふれて空しく月日を送らむとは物狂ひし給ひしにはあらずや

と諭さるに心づきては返さん言葉もなくやがて家路につきぬ

平野　君子

秋のけはひのたつまゝに池のわたりの梢とも皆錦の雲のたなびけるが如きを見ふと思ひ出でられたるは龍田山の秋の錦今を盛と織り出ぬらんと學びの窓の友どちひとり二人打つどひてたつた山近う行きぬ最早ほど遠からじと皆足を早めて語り合ひつゝ行くまゝにやがて彼地に行きつきぬ多くの人々皆瓢をたづさへ居所を撰び毛氈を敷きて其心をなぐさむ其數の多きこと山の如し我等は川に船をうかべたれば霞の中を行く心地しぬ棹のまに／＼彼方此處とこぎめぐるほどに紅葉守の社ならんとおぼしきものまうけありたれば

名をきけはむかしながらの龍田彦

かせなふかせど紅葉するころ
とよみふと月のにはひうら〳〵と西山にかゝやけるを見いそぎ賤家さして歸り來りその由をかくはものしぬ

磯部つや子

秋もはや暮れかゝる昨日今日やう〳〵に色深めたる木々の紅葉のうつくしさいはんかたなけれど名に老る瀧の川のけしきをとはんものと思ふどち二人三人打連れ立ち朝日影小暗き頃わか家をわかれ出でぬ道すがら何となう心うれしきまゝにあゆみもかろくやがて志す方へいたりをかしげなるあづまやにいこひて見渡せど古しへの花にも優る秋の紅葉といはれしごとくげに大和錦織りなすかとうたがふばかりくれなゐのうすくこく流れも清き瀧の川にうつろふ樣筆にも言の葉にもつくしかたうてなんさながらに仙人の里に遊ばんもかくやと思はれて床しくも亦なつかし各も〳〵あるは和歌に詠じあるはふみにつゞりなどして興味とりどりなりし程に短かき秋の日のいつしか西に傾きたれたいざ歸らむとちりうちはらふ折しも夕日影いみじうかゞやきわたりて尚ほひとしほの眺めを添へければ

暮るゝ日のをしくもあるかな瀧の川
にしき織りなす梢てらして

など口ずさみためらふ内ねぐらをいそぐ村鳥の聲に打驚き見返り勝ちに家路をたどりぬ

天井　てふ子

この頃の夜毎にきこゆる鹿の音に奥山の紅葉の色もさこそと思ひやられて坐ろに山の手のみに心ゆきわけて時雨する夕にはこの雨に一しほのけしきをや添へたらんを夜半のあらしの時の間も心もとなきにあへなく山路のにしきとなさむいかにくちをしからましと宿に安らふ心も心ならずある日時雨の雲の限なく晴れわたりけるに催はされて秋きぬればと待ちし山路にいでたちぬ道すがら霜にかれたる千草のさまもいやあはれなるにさして心うつりもなさず行き過ぎて山のふもとにさしかゝり谷ふかく流れくる小川の水にもみぢばの二ひら三

ひら浮びて流れゆくに心いそがれ小走して山奥遠く分け入れどまばらながらも木々の梢ははや紅の色ふかくしたてる影のかゞやかなるに心うかれてしばしはかたへなる木の上根に腰うちかけてながめくれしがふくとなく風に散りかゝる五ひら六ひらのかげにやう〳〵あはれを覺えて古き人の言の葉も思ひ出でられ觀る人にひきかへてちりゆくものゝ心もかなしく思はず袖にしぐれを掩ひたる時しも夕をつぐる鐘の音のはるかの里にきこえければ名殘をさき家路をさして急ぎつゝいくたびかうしろをふりかへりぬ

竹内　淑子

たきの川のもみぢいつしか見てんとおもひをりしにをりよしやけふこのころ二日三かのひまゑてしかたいざやとてあひしれる友どちてとりかはして行きぬあきかせのふきにし日よりやそめつらんくれなゐのにしきいろこくて日のてりそひたるけにいはん方ぞなきさるにても白つゆのいかでかくはそめぬらんとぞおもはゆる

くる人はこの木のもとを立やらで
　　もみぢのにしきをそらんとぞする

日もくれかゝりたれば夕日にてりそふもみぢをばあとに見てかへりぬ

碓井　信子

秋もはやくれなゐ深くなりぬれど大方の木の葉はさだめし人まち顏に美しき色やそめ出ぬらんと日頃ちぎり淺からぬ友垣とよき日をえらびみ山にわけ入るは女子としていかゞしき事と思ひ其名もしるき立田の山に紅葉狩なさんとものしぬげにや草も木も一夜の霜に色そめかへて緑なす常盤の松の操さへ此の錦の色にやうむはれけむ見渡かぎり錦の林に錦のもうせんしきたる如しこを見てふと思ひ出しゝ事ありいつぞや敎への庭にて師の君のいともねもごろに林間に紅葉をたきて酒をあたゝむてふ講義なし給ひしが彼の仕丁は帝のめでたまふ紅葉をもかへりみず此の如き美しき枝をむげにも手折てたき火となし酒をあたゝめしよなさるにても御仁心深きひろきみかどにましまさずど彼[illegible]仕

丁は如何ならんなどかたらひつゝしらず〳〵進み來て流をながむれバ紅の色もみどりの水にうつりて一入興ふかしかゝる風情をあだに面白とのみ言ひ通し歸らんも口をしき業なめりいざ〳〵何かものしたまへやと友垣に進めらるれど學びあさきおのが身のいかにしてよき考へ出來うべきと答へすれども云ひてきかざれバいまさらいなみがたくさらば互にものしてんとてなき智恵袋の緒をときて人かげ少き梢のもとに立ちよりて幸此の兼題をものしぬかくするうち時もへぬれバかぞいろたちさぞやあんじ給ふらんと一枝を求め足をはやめて家路に歸りぬ

香川　穎子

ある日親しき友にそゝのかされ近きあたりの山路をわけておくふかく辿りゆくにそこはかとなく立てる木々の梢あるはうすくあるはちしほに染いでたり見や山姫が心ひとつに織なしたる錦なるらんその紅ならぬ色のなつかしさは二月の花の衣も物かはとぞおぼゆるまことやこれなからましかば世に春秋の優劣を論ふはさまでかたきわざにもあらざるめりなど語りあひつゝあかずめではやすほどにいつしか暮ちかうなりて夕陽の斜に照りそひたるけはひ何ともいはんかたなし心ありげよ三つ四つこばれかゝる紅葉ばを今日來ぬ人の爲にもとひろひとりなどするほどに俄にをぐらくなりわたるはや日のまた〳〵暮れたるなりけりあなやと驚けどせん術なくてやがてかすかにてらせる三日月に送られ辛うじて家路をたどりつるはなか〳〵にをかしかりつる事になん

宇多田楊子

頃しも秋の半となりぬれば二三の友どち打連れて紅葉を尋ねんと山路を指して出行きぬあなたこなたと探せども中〳〵に見當らず上る坂路に息もたえなんばかりなりしも尙たゆまず行く折からかすかに鹿なく聲の聞ゆれバそれを便りに奥山深く分け入り見るにあなうれしや一二本立ちならびたるがちしほに染み出て山姫の錦の衣をさらせるかと思ふばかりなり傍には谷の小川の淸き流の影をう

つしても問はれぬうつくしさに世に謂ふ錦川とはこれならむなど、賞しつゝあたりの苔のむしろに息ひてながむる其の心地よさ何にたとへん方なく中／＼に花の春も及ばぬ景色に時のうつるも知らず愛ではやしぬ折しも何處の山寺の鐘ならん遥かに暮れ告げ渡る音に驚かされいと惜しき心の殘りぬれど今日の形見と一二枝手折りてやがて歸路につきぬ

土屋てい子

此頃の空のけしきや、時雨もよひの雲のみゆれば今は箕尾の山の梢も染つらむと心あてに友どち打つれ立て紅葉狩せんとわけ入りぬ道の行く手のいつ柴原に染はじめたるはぬるてのや、黄ばみたるなりなほおくつかたを志してわけのぼれば瀧のあたりのひと木ふた木いとうるはしく染なして水の白きに照りあひたるえもいはれずこゝにて彼の有功卿の白河の瀧つ白糸もみぢはに染かはりたる名や流るらむと詠じたまへるは所こそかはれさもあらむとゆかしなほ狩暮さんと志す方ありつれど先づいろよき枝を折りたるを今日の獲物とさしかざしてはこりがほに箕尾山のふもとに下りぬ

降田　槇子

おもふどち打ちつれて朝まだきより草葉の露をふみわけつゝとある山に物しけり頃しも秋の半にて露霜は木々の梢を染出しみねにもこき紅のきぬひきはへたらんやうなるが花やかにさし昇りて朝日ににほへる樣はえも云はれずなん色かへぬときはの松のこゝかしこに交りたるはまた一しほにてかたへを流れくる谷川の清き水にもみぢのちりて流れたる龍田の川もかくやと思ひやられてからくれなゐの歌さへ口すさまれぬかのもみぢ一枝ををりて見ぬ人のつとにと撰れる方をさしてのぼり行くにさかしといふにはあらねど習はぬ山道なれどいと苦しうてあへぎつゝやう／＼思ふところにゆきつきぬさてそこにて岩に腰うちかけあたりの景色など眺め居たるにまた時過ぐしてはとてかれやよからんなどのゝしりつゝとゞむるものもなければおのがよしと思ひしををりて互にはこりが

にもとの道をたどり心をも高ねに爰してぞ歸りける

靑木はる子

年ごろ音にのみ聞きておのれいまだ瀧の川の紅葉を見しことなければいつかみたやと思ふ折から今日の新聞紙に瀧の川は去年よりは早くもみぢして今は見頃りなりぬとあるにいとうれしく親しき友がき三人をそゝのかし滊車の便に依りつゝやがて王子の里につきぬ此處より瀧の川にそひ水かみにたどり行きしにげに聞きしよりまさりて紅葉のけしき言ふばかりなし左れど程よき所の小石に腰打ちかけてながむるに見渡す限り或は濃く或は薄くさながら千むらの綾錦かけたらんやうなるに日影さへそはりてまたゆきばかりなり又前なる川の淸き流にさつと吹き來る風に紅葉のちりて水に浮び紅の色も一ト入まさりて其美しき事いはん方なくつたなき筆もてかき盡す可もあらず昔神代もきかずと打踊せし人の今あらば如何にめでなんなどかたりあふに友なる三たりは敷島の歌の道にもくわしけれど我　大君の御旗あるはとんび國の無禮を打ちはらひ　皇國のために限りなきいさをゝたてし人々の赤き大和心など思ひ出でゝ踊み出でらるゝにいでやおのれもと腰折一二首口すさびして友がきの笑ひを招きけりやがてかなたこなたをさまよひしにあるは宗匠の短冊もて名句をさぐるありあるは古人の林間に紅葉を燒きての風雅をならひしにや火をたきて酒をあたゝめ顔は紅葉の色にもを さ〳〵劣るまじき者ありあるはステッキふりて枝打ち落しとんびの頸をこのよふにとよろこぶ風雅を知らぬ書生ありかくてめぐり〳〵て飛鳥山に至りしに折からかすかに東叡山の入相の鐘の音聞えけれど急ぎ滊車にのり各々家に歸り後の思ひ出にもと燈のもとにかくはしるしぬ

加藤　種子

月日の流れはよどみなくはやことしも立田川瀨に錦ながれん頃ともなりぬれどいつか一日は日頃のうさやりに近きあたりの山などみめぐり見んとひたおもひに思ふ折しも折よく或る朝友垣一人二人

おとなひ來てうながしつれどいざやとておのれもうち立ちぬ久方の空には棚びける雲もなくあし引の四方の山々はこゝかしこ見わたすかぎり茜さす旭のいろのさし染めてさながらくれなゐの花の今を盛にみちみてるがやうのさましてそらみつ大和のくにの山のかひより流れ來る水は濁れる塵もなくいとゆるらかなればにや水底にも錦の色のさしうつりたるなどたとへ名たゝる畫士なりともいやはとりうつしゑむとおもはれてげに秋のながめのいとあかずもあるかなこひしくど見ても忍ばんなどうたひつゝやがて山のおくさしてわけ入れどそがひのみねよりおつる瀧の瀬はあけのしら玉こきちらし岩走る岩間の淸水もあけの色さし帶びてみゆるなどげに何處を尋ぬともかゝる心ゆくはなかるべかりけるにましてひるのいひ食まんと志しをりにけるもみぢの枝をしとねとして徃さ來るさをりゐて打かたらふは夢にのみゝける錦を今日まのあたりに身にかざれるが如き心地なんしてむも言の葉にもえおよばれずやう〳〵ときすぐるまに一人がいざ日のくれぬ内にといへど皆立ちて家路をなんたどり來けるにうべ變り易きは秋の空とか今迄うらゝかにはれわたりにし空合の俄に雲さし起りて峯よりおろす風さへ吹き添へたりければ木木の錦の綾の緒や絶えにけん麓にも尾上にも時ならぬ紅葉の花の波立ちて春のまさかりに花の散るよりは色一入に見えけり巳等錦たち着る心地もなんしけれどいとさすがなればひとりが

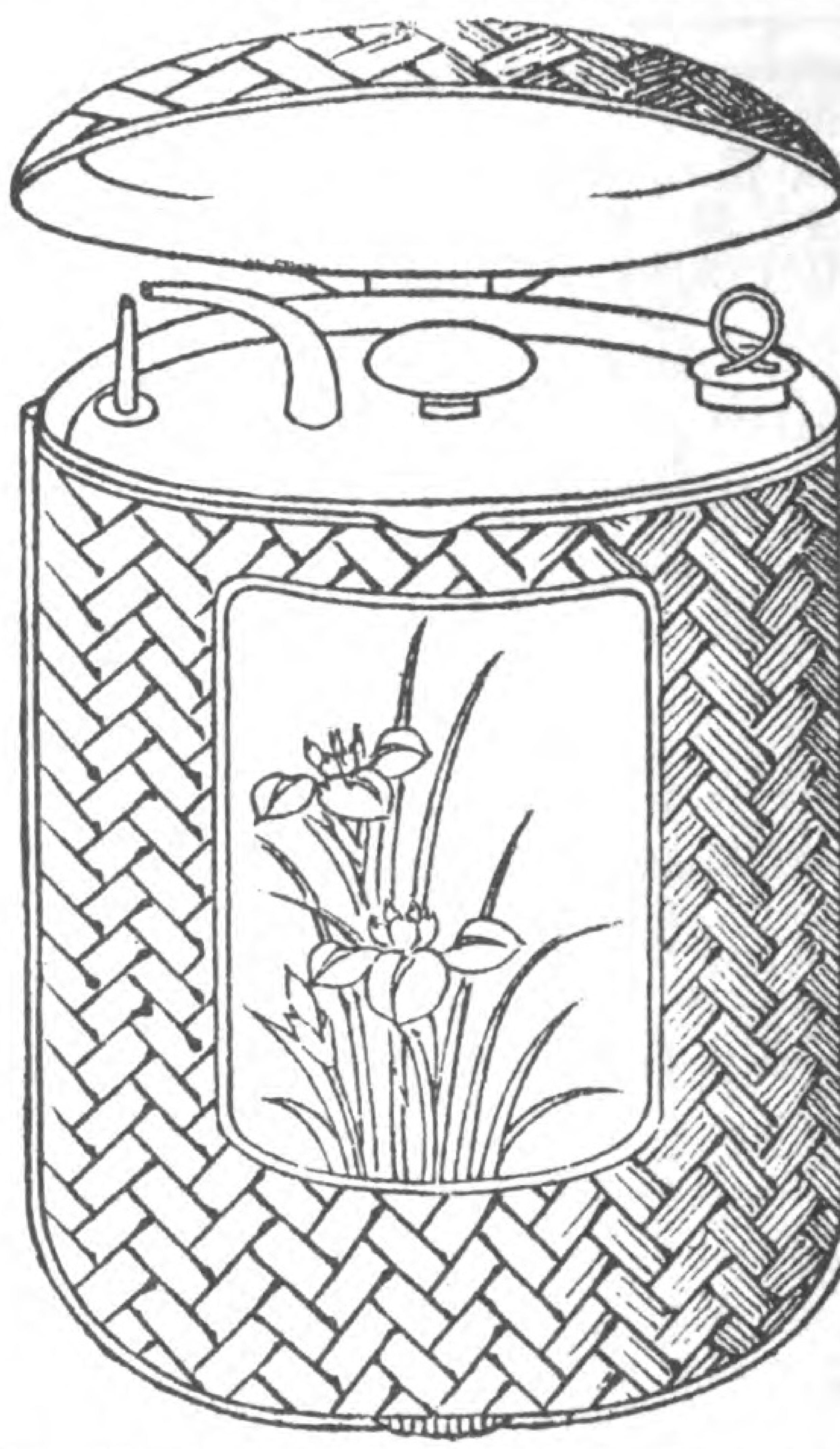
　　木枯はしつ心なく吹きよせて
　　　春にしられぬ花のちりける

をりにあひてにつかはし彼のゆるらかなりし川も今はにしきの瀬とぞなりぬるさて今日のあそびのこと巳のいはにみなつとはひてはなしなどしてわかれにけり一日のあそびにてつもれるいぶせさもやゝはれにけり

今般弊店に於て**專賣特許**を出願中なる**懐中香水吹**器具の儀は弊店が多年實地製作に從事し幾多の經驗と工夫とを凝せしに今般漸く其整功を見るに到れり

此器具は最も輕便調法なる新奇發明品なれば装飾用は勿論紳士貴婦人方は衛生上御携帯品として片時も欠く可らざる必要品なれバ何卒御試用の上如何よ實用に適するかを御證明被成下度

近時種々の新發明新工夫の品物尠とせず然れども弊店發明の懐中香水吹の如き定價廉にして啻に香水に止まらず散布用一切に適當なるは他に此類わるを見ず之れ實に弊店獨得の發明なり今般賣擴めの爲め多年御引立を蒙りたる御花主樣へ御禮として實價にて發賣仕候間御試用の上は御朋友樣方へ御吹聽の程奉懇願候



定價

水量四十グラム入

眞鍮製 金九十五錢

洋銀製 金一圓十錢

其他金銀赤銅四分一等御好次第調進仕候

尚又弊店調進の袋物、紙入、煙草入、煙管筒、煙管、指環、帶留、その外貴金屬寶玉珍石象嵌等の品々總て貴顯紳士令孃令閨方の御携帶美術装飾品は猶一層職工を勵まし其製作と彫刻を吟味致し調進仕候其品柄は堅牢優美にして坊間尋常の品とは一見雲泥の差わるは各御花主樣の疾に知らるゝ處とす且つ弊店の店則として懸直又は巧言等は不申上精々相働き正價を以て御調進申上萬事信用專一に營業仕候に付多少を問はず御用被仰付度此段併て奉願上候

袋物及貴金屬裝飾品商

電話架設中

丸屋商店

東京市京橋區銀座三丁目十一番地

内務省衛生試驗所無害成績書下附　馬島直發明

登錄商標

活生善粧 歌舞伎白粉

粉白梅（紙包 三錢／紙筒 六錢）

ねり白妙（美器入 六錢 十錢／十五錢 卅錢／五十錢 一圓）

水白妙壜詰十錢廿錢外に驗方用もあり（肉色）

試驗報告

東京日本橋區小網町三丁目一番地

依賴人　馬嶋直

第二百七十三號

歌舞伎白粉　一種

右衛生上害否鑑定右試驗の爲め製方書を添へ當所へ差出たる品は芳香を有する白色の粉末なり之に就て試驗を施行するに鉛等の有害物を撿出せず依て本品を化粧料として皮膚に塗敷するも衛生上無害なりとす

明治廿六年九月十五日

東京衛生試驗所

所長醫學博士　中濱東一郎（印）

試驗主任　山本正巳（印）

從來の白粉は芳香を有し乗も能く製しあるも素鉛粉を原基とせし故其毒は自然我體の膝理より脂肪中に含める酸類に溶解け益深く吸取れ白粉燒より何時となく其鉛毒の爲め身體衰弱し終には危篤の腦症を發し鉛毒の爲非命に斃るゝ者多き事は明瞭なり故に目下衛生上の一問題なるは何人も知る所なり弊堂數年來深く心を此改良にせよせよ學理と實際とに照して特に日本藥局法規定に係る藥品のみにて**一も鉛粉を用ひず**始て前古無比の白粉を發明し既に上に掲る如き證明書を賜り積年の苦心爰に良結果を得始て世上に廣賣するもの故御使用の御方は罹毒の憂なきは勿論嘗に**無害無毒**にして他品に優る特功あることは夭折弊堂の署て之を保證するのみならず**博士の賞贊貴顯の禮狀**古代の沿革、俳優の死亡統計、化粧法、等皆包紙に詳記しあれば陸續御購求ありて美貌となり天壽をも全ふせられん事を

發明製造本舖　東京日本橋區小網町鎧橋際　博濟堂　**馬島直**

發賣本舖　同京橋區銀座一　電話四百七十二番　つやふきさん本舖　**佐々木玄兵衛**

女鑑第七十一號目次

社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送之事○郵便爲替は東京銀座郵便取扱所へ御振込可被下事○郵券を以て代金に換用せらるゝ時は一割増の事○別に領收書差出さず金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若強ひて領收證を要せらるゝ方は別に證書郵送料御送附の事○未納税の來信は一切受取不申候事

女鑑

每月貳回發行 五日 廿日

定價壹册金十錢
三ヶ月前金五十五錢
半ヶ年前金壹圓
但全國無遞送料
廣告料五號活字二字詰一行金二十錢

明治廿七年十月四日印刷
同年同月五日發行

東京京橋區築地二丁目二十一番地
發行兼印刷人 川崎直衞
同 編輯人 山根勇藏
同 發行所 國光社

(明治二十四年八月八日內務省許可)
(明治廿五年三月十二日遞信省認可)

(印刷所 東京國光社印刷部)